

山小屋、環境と登山

南アルプスの山小屋、サービスを中心として

山小屋は、冬期開放小屋以外ほとんど使ったことはない。しかし営業期間中の様子を宿泊者から聞いたり目にするには多い。

南アルプスで特に変化したのは南部だ。公営小屋の新築ラッシュで登山者の質が大きく変わったのだ。

81年熊ノ平小屋、84年高山裏避難小屋、86年中岳避難小屋、88年赤石小屋、90年横窪沢小屋、91年聖平小屋、92年百間洞山の家、93年茶臼小屋、94年千枚小屋、96年荒川小屋と赤石岳避難小屋、98年光小屋と小河内岳避難小屋が建てられ翌年から使用され始めている。旧小屋は、百間洞山の家、茶臼小屋、赤石岳避難小屋、光小屋、小河内岳避難小屋が撤去されたのに対し、横窪沢小屋、聖平小屋、赤石小屋、荒川小屋では残され自炊と冬期開放小屋にされている。06年秋、聖平小屋の旧小屋は撤去された。

これら新築されたどの南部の山小屋も、外観はペンション風というかログハウス風というか非常に素晴らしいものだ。それらは全て静岡県や静岡市が建設し、民間に運営を委託している。南部はほぼ全てが公営小屋だ。

北部にも公営小屋が多い点が、ほとんどが民営小屋である北アルプスとの大きな違いだ。長谷村村営(現、伊那市営)は北沢峠の長衛荘、藪沢小屋、仙丈(ヶ岳避難)小屋、芦安村営(現、南アルプス市営)は広河原山荘、北岳山荘、両俣小屋、北沢長衛小屋(現、北沢駒仙山荘)、白根御池小屋、山梨県営は薬師小屋、白州町営(現、北杜市営)は七丈小屋。それらは公営とはいえ、小屋の管理を委託された人の自由裁量が大きく、サービス、食事内容等に相当差がある。なお、06年4月から広河原山荘、北沢長衛小屋(現、北沢駒仙山荘)、白根御池小屋はNPO法人「芦安ファンクラブ」の運営になった。NPO法人といっても「芦安ファンクラブ」は主催者が関係業者中心だから、公営山小屋として責任の所在がぼやけ、登山者からのフィードバックの効かない運営にならないよう祈るだけだ。両俣小屋は両俣竜胆愛好会が指定管理者という。地の利が悪い所は料金が高いとか、地の利のある所が食事の内容が良いといった単純なものではない。しかし、南部の小屋と同様、多くが一律の高価格制を取っている。デフレの影響は全くない優良ビジネスだ。行政は巨費を投じて作られた山小屋を事実上無料で貸し、運営を委託している。

民営は、三伏峠小屋(三伏沢小屋は04年シーズン前に撤去された)、塩見小屋、北岳肩ノ小屋、農鳥小屋、馬の背ヒュッテ、大平山荘、仙水小屋、早川小屋、鳳凰小屋、南御室小屋だ。それらは、最低の公営小屋と同等のサービスの所もあるが、一般にサービスが良く、料金も安い。公営の小屋が、何の資金援助も受けていない民営の小屋より高価格とは、南アルプスの七不思議の一つだ。

ところで、南部の新築された公営小屋の多くは、山での使用をほとんど考慮されてない構造で驚くほど使い勝手が悪い。古い小屋の基本構造は、入り口を入るとたるまストーブのある土間があり、その両側に床が張ってあるというものだった。雨でぐしょ濡れ状態でも直ちに土間に入れ、濡れ物をすぐそこに干すことができ暖も取れる。しかし新しいペンション風のもは少なくとも客用のストーブのないところもある。入り口が売店になり、雨具を外で脱いでから入らなければならないのは熊ノ平小屋、百間洞山の家、千枚小屋、赤石小屋(本来の玄関からは出入りが禁止になっている)等。東海フォレストが運営する山小屋は殆ど、正式の入り口はスタッフ専用、そして物品販売所になり、客は外階段を上り、外で靴を脱がなければ入れない構造的に本来の入り口ではない2Fから出入りさせられる。茶臼小屋、聖平小屋、荒川小屋等は小屋に入ったもののまとも濡れものを干すスペースもない。98年夏、聖平小屋の入り口には「小屋内での飲食と干しものを禁ずる」との張り紙があり、その思想は、今でもほとんどの南部フォレスト系公営小屋と共通のものである。「酔っぱらいおこわり」と張り紙をするなら、入り口にこれ見よがしに酒類を置き、販売に精を出して欲しくないのは赤石小屋だ。百間洞では、たとえ誰もいないテン場に、夕方の土砂降りのなか辿り着いても、数分かけて小屋に行き、寒さに震え、濡れて凍えた手で受付をしてからテントを張らないと、睨み付けられ散々嫌みを言われる。夏の南アルプス縦走の成否はその長さ、大きさ同様、不快山小屋との戦いであるとは、多くのテント山行者の偽らざる常識である。東海フォレストのテント敵視政策は有名だ。99年からはテント山行者が激減し、大ツアー敬老団体ばかりになっている。最近では、小屋泊まりは大騒ぎが出来ないからテントにしたと公言する人がいくらでもいるという。05年からはツアーも終焉を迎えつつあるような気がしている。ツアー客の集まりも悪くなったそうだ。北部の公営小屋ではほんの少しだが値下げするところさえ出ているのは前代未聞だ。テントの人にモラルがないと批判する前に、光小屋や七丈小屋のようにテント場を小屋の近くに移すべきだろう。百間洞、熊ノ平等々、小屋周りのテント場は小屋泊まりの人のためにベンチがついた青空宴会場にされ、テント場をわざわざ遠くに隔離した。トイレまで5分もかかるとは、モラルを説く方がどうかしている。何だか、小屋を利用しない人に憎しみがあるかのようだ。売り上げが自分の収入に直結するといっても、公営山小屋としての役割を果たさない拜金主義は問題だろう。

小屋番は東海フォレストの正規雇用の社員ではなく、単なるアルバイトの日給月給制で、物品販売の売り上げを会社と配分するシステムというから、手荒な草刈り場として運営する人が出てくる。山ではリピーターが少ないからと、そんなことが許されるのだろう。実際運営している人が、行政から委託されている会社の正規社員でないから近視眼的に儲けに走るのかもしれない。数年ごとに人が変わるところが多い。実際運営している、山を殆ど知らない小屋番と、山小屋を作った行政の間に会社が入ることにより、まともな普通の登山者からのフィードバックの利かない小屋番名主制がまかり通る。公共のものを本来の目的とは違う、観光客向け安宿か土産物屋かのように運営する。会社には社会的責任があるはずだ。社会に反することをやるから、「社会」を裏返し「会社」と書くのではない筈だ。会社が直接の管理責任を持たず、バイト小屋番の行為を黙認、その上前を取るようなやり方は前時代的である。

03年9月施行された地方自治法により、公共施設の管理運営が民間企業にも可能となった。それ以前から、東海フォレストは公営山小屋の管理運営をどのような仕組みで請け負っていたのだろうか。しかし、彼らがまた実質的に孫請けさせ、山小屋管理のための適切な指導もしないから、山小屋を収容所のように運営するバイト小屋番がはびこる。他の南アルプス南部の小屋は、観光協会等、準公的機関が名目請け負っても、実際はそこから直接個人が完全に請け負っているから、すぐ修正が効き、まだ風通しがいい。会社が関与することにより、責任者が分からなくなるからどうしようもない。公で建設したものは、一定の基準でサービスを義務付けるよう行政は責任を持つべきだろう。東海フォレストの実質的な孫請け運営を黙認する行政は、何に遠慮しているのだろうか。運営を民間に任せても、公営山小屋として一定水準の質は確保して欲しいものだ。これでは、特権的地の利を利用して稼ぐ、道路公団のファミリー企業だ。親会社、東海パルプの名誉のためにも好ましくない。

冬期開放スペースも悪天候での利用がほとんど考えられていない。旧小屋の残されている所は、今のところ古い小屋を利用できるのでよい。しかし新しい小屋が建てられてから、旧小屋は壊れるに任せ崩壊は時間の問題だ。

茶臼小屋は扉を開くとすぐ土足禁止の床になっており、悪天の時にはそのまま入らざるを得ず小屋も傷むだろう。熊ノ平小屋も同様だ。百間洞山の家や赤石岳避難小屋には土足用のテフロン板(?)が敷いてあり、登山者にデリケートなバランス歩行を要求する。アイゼンが必要なくらいだ。

雨戸の構造は気候の穏やかなところのもので、隙き間だらけだが嫌に重い木製の引き戸のところが多い(茶臼小屋、赤石岳避難小屋、小河内岳避難小屋、百間洞山の家等)。雨戸や窓の立てつけも悪く、一般の古い家と同じだから雪がレール部から吹き込み凍りつき、かんぬきの

つまみも小さく開閉もままならない。これ程粗雑な構造の建物は物置レベルだ。

ほとんどの小屋が、気象条件の厳しい中部山岳の高山地帯に建てられることを想定して設計されていない。94年9月の台風26号で、新聖平小屋の屋根はきれいに50m以上飛ばされ茶臼小屋の屋根は破られた。しかし旧聖平小屋入口の扉は開き、中はすっかり風で掃除された状態だったが、びくともしていなかった。翌年、各新山小屋には、庇から地面に何本もの鉄棒が補強のために取り付けられた。完全に設計ミスである。

なお、光小屋は夏の出入り口はもちろん冬期開放スペースにも土足で入ることができるだけでなく、雨戸はなく全て二重のガラス窓になっていて室内は明るく、唯一よく考えられた新小屋だ。トイレはバイオ式とのことだが、季節外も1個開放という配慮がされている(04年には反対側にまた新たなトイレが作られた)。普通の家ではないのだから、中途半端な雨戸をつけるより常に明るい二重窓等にすべきだろう。その他、毎年改善が見られる。小屋管理者の意向が反映されたものらしいが、他の小屋の管理者は一体何をしているのだろう。土建国家の面目躍如の箱ものが多すぎる。なお光小屋は営業期間中の食事つき宿泊に「3人以下のパーティー、全員50歳以上、三伏峠以北からの縦走者は除く」との制限を94年から設けている。山小屋をどこかの発展途上国の粗野な宿の如く運営しているところが多いのに対して、山歩きを楽しみに来ている登山者をサポートすることを第一に考える運営は、山小屋としては当然が大変評価できる。南部の公営小屋としては珍しく寝具なし素泊まり料金は安い。北部の白州町営(現、北杜市営)七丈小屋と同様、公営だから悪いということではない証拠だ。七丈小屋は97年から、南部の公営小屋の料金引き上げに対抗するかのようになり、素泊まり2500円、テント300円と料金を下げた。にもかかわらず対応が良く暖房のサービスがあり、ほぼ通年営業していた。南部の小屋には大抵小さな石油ストーブがあるが、小屋の構造的にも部屋全体を暖めることができず、せいぜい手を温めることができるだけだ。食事は、南部の小屋のようなお手軽なものではない。しかし、03年バイオトイレ化され、04年から素泊まり3000円、テント500円に上がったが、あのサービスと快適な小屋、テン場を考えれば十二分にリーズナブルな価格といえる。料金が安い上、親切な対応、いつも暖房され暖かく使いやすい小屋は光小屋と双壁、南アルプスの良識だ。なお、七丈小屋は96年から現小屋番に代わり、それ以後ほぼ通年営業するようになった。以前は冬期使用は無料だったものが、有料化された。しかし、突然値上げするのではなく、移行措置を設けそのことが周知されるまでの数年間はこれまでどおり無料にしていた配慮には感心した。小屋番が責任を持ち、登山という行為をよく理解しポリシーを持って運営すれば、その様なことが可能になる。それに対して、東海フォレスト系のテント代はべらぼうだ。99年から全て600円だが、水洗とか紙が付いていないポットトイレのところも同じだ。00年、

バイオトイレ化され紙も備え付けられた民営の南御室小屋北部は、今でも400円(06年から500円、光は今でも400円)となっている。東海フォレスト系は1.5倍の料金と言うことになる。

ところで、東海フォレスト系の例として熊ノ平小屋のテン場について書いてみよう。99年に小屋番が変わってからは全く管理されず、どんどん崩れ50年前の「水と燃料こそあれ余り心地好い露营地では無い自然の状態に戻っている(竹内栄、「南ア中部主脈縦走」、「岳人」、54年6月号、62頁)。近々小屋も撤去するといひ、06年からは96年までの小屋番に戻ったが、荒れ果てた水場、崩れかけた小屋土台、テン場はどうしようもない負の遺産だ。前小屋番は町に戻り、家を新築されたとのことだ。

光小屋、七丈小屋と比べどちらがまともな山小屋か、誰の目にも明らかだろう。ちなみに東海フォレスト系の公営小屋は05年時点でそれぞれ4000円、600円(北アルプスでも500円)だ。

しかし、公営小屋がビジネスホテル並みの素泊まり料金を設定するとは、山には食料や寝具を持ってこない方がよいと勤めているようなものだ。松本ではここ10年、ビジネスホテルのサービス向上と料金低下には目覚ましいものがある。ビジネスホテルに泊まって、あちこちの山に登った方がはるかに安く、気持ちがいい山行が出来るくらいだ。小さな日本の山で、食事つき山小屋に頼った山行は、ほとんどピクニックである。彼らに、七丈小屋や光小屋を見習ってほしい。

スイスの山小屋ではレートにより少々変わるが、食事つき6500円、素泊まり2500円くらいだ。食事は、スープ、パスタ、肉、マッシュポテト、サラダ、デザートのような一応フルコースである。食事が2ラウンドになるようなことは滅多にないようだ。おまけにスイス山岳会会員であれば、素泊まり料金が半額になる。このような食事と素泊まり相当分の比率で当然の筈だ。これに引き換え、南アルプスの多くの山小屋は悪い意味で官僚的すぎる。まして、大した料理を出さない日本の山小屋なら、食事相当部分はそれ相応の料金にしないとおかしい。

スタッフの居室に入ったことはないが、一般家庭のように押入のついた畳の部屋になっているという。しかしスタッフの部屋を快適にするのは当然だが、小屋を一夜の宿りとして山行を続ける人の使い勝手がほとんど考えられていないことは問題だろう。たぶん、気の置けない仲間が集うクラブルームといった目的のための小屋として設計されたようで、不特定の人が利用するという事は抜け落ちている。また山は天候の悪いことが多く、濡れることそして濡れた衣類を乾かさなければならぬこともほとんど考えられていない。

表面的なモダンさとは異なり、登山者にとって昔のものよりはるかに使い勝手が悪い。

ところで、80年秋に熊ノ平小屋、93年秋に千枚小屋が焼失した。どうして見かけ倒しのウディーな小屋ではなく、不燃化した小屋にしないのだろう。作業のしにくい高所に飯場を建て

て現場で建築工事をするより、例えば、冷凍コンテナを改造した不燃で気密性の高い実質的な小屋をヘリコプターで運び上げる方がはるかによい。ウッディーな小屋は常にメンテをしなければ痛みやすいので、その必要のない構造のものにすることが合理的だ。

山小屋スタッフにチェーンソーが多いのも問題だ。03年5月には「健康増進法」が施行されている。第二節、受動喫煙の防止の第二十五条に「、、多数の者が利用する施設を管理する者は、、必要な措置を講ずるよう努めなければならない」とあるが、公営小屋にも拘わらず今だ何の方策も取られていない。

現在建てられている新しく見栄えのよい小屋のどれも、作りはひどく粗末で隙き間だらけ。木材はふんだんに使われているが、釘で打ちつけるだけといった工法の部分が多く、メンテもほとんどされないのだから古びてしまっている。定期的に外壁の塗装をしたり、手が入られている北部の個人営業小屋では考えられないことだ。これも親方日の丸的悪癖に違いない。

東海フォレスト運営の南部公営小屋には、県営、市営との表示のない所があり、例えば熊ノ平小屋では驚くことに02年までの数年、看板の市営という部分に板が打ち付けられ隠されていた。雑誌やガイドブックにも、東海フォレスト運営の小屋だけは公営との表示がなく、多くの登山者はスタッフからどのように扱われようと、民営だから仕方ないと諦める。熊ノ平小屋の件を指摘されても、行政側は管理者の不貞におおらかだ。「市営」を隠していた板は翌年取り外されたが、かの管理人の態度、運営方針は全く変わらない。近い将来の払い下げ、民営化を念頭に置く地ならしのつもりかも知れない。なぜ山岳雑誌やガイドブックは公営と明記しないか、山小屋を評価したり批判することをそれほど避けるか、腐臭ふんぷんである。山小屋で接待を受けている雑誌スタッフを見たことは何度もある。小屋番が素っ頓狂な甲高い声で歓迎の雄叫びを上げ、こそこそ別室に案内するのですぐ分かる。行政は民間に運営を丸投げしなくても、その職員が真のホスピタリティを学ぶために1週間交代くらいで入山して管理すればよいだろう。最近はやりのデパートやコンビニでのマニュアル的研修より、はるかに主体的なサービスを考え、身につけるよい機会になる。食事さえ出さなければ簡単なことだ。森林限界以下の一部の食事を出す小屋では、その部分だけ民間に委託して別会計にすれば全てがすっきりする。現状の素泊まり料金と食事料金相当分の割合をスイスの山小屋のように逆転させた方が、必要経費の実態に合うものになると思う。それが本来の山小屋の姿、サービスではないのだろうか。

南アルプス南部の静岡県側は、東海パルプの私有地という。戦後の土地改革は農地に限られ、山林は手つかずのまま残されたものだ。だから、現代における山林地主は、一種封建的遺

物だとも言える。会社は自然人と同様、法律上の権利や義務を有する主体だ。どちらであれ、広大な山林所有は古い時代からの既得権益との感がする。南アルプスの山林で、もはや新たに利用できる所はなく、手つかずの所は森林限界以上の所だけだ。東海フォレスト系は、小屋と登山道が東海パルプの私有地にあることを、登山者支配の道具に使う。使わせてもらって有り難いと思えと、はっきり言う小屋スタッフもいる。しかし、本来、自然は個人の所有物ではなく、誰でも自由に使うことが出来るもの筈だ。もし、アマゾンの熱帯雨林が地球の酸素を作っているなら、世界の国々はその人口に応じてブラジルに酸素使用料を払わなければならない。このように土地の所有権をあまりに厳密に認めることは公"public"の概念に反する。自然は個人や会社の奴隷ではなく、個人や会社は自然を独占できるものでもない。会社にも社会的責任とモラルが問われるはずだ。否、会社は一層モラルを守らなければならない。会社の中の個人には、自然人つまり一般の個人のような責任が課せられないので、暴走したら止められないからだ。東海フォレスト系山小屋スタッフは会社の笠の下、登山者を管理し、利益を上げようとするだけで、全く会社の社会的責任さえ意識したことがない人が多い。公営山小屋としての社会的責任に無自覚だ。たとえ非正規雇用であっても、会社の元で働いているなら、個人的利益追求の前提として、会社の、公営山小屋の社会的責任を果たすような、立派な仕事をして欲しい。現在の運営は、明らかに親会社、東海パルプの品格を著しく傷つけている。民営小屋のように振る舞い利益を上げたいなら、自分で小屋を建て、社会的に許される範囲で好きな運営をすればよいだろう。

寝具を干すこともなく、使用しない時は頭の位置で畳んであるだけの小屋も多い。これは是非「南アルプス南部山小屋」モデルとして発信して、日本の閉塞感を吹き飛ばしていただきたいとの皮肉の一つも言いたくなる。

赤石岳避難小屋、中岳避難小屋、高山裏避難小屋、小河内岳避難小屋はどれも避難小屋とは名ばかり。一般の小屋でも食事は軽食に毛の生えたようなものだから軽食を売り、シュラフを貸し出せば2食つきの一般小屋と同じ料金になる。それでも日本的運用では避難小屋となるらしい。予め避難小屋を当てにした登山者も見られるようになった。それを頼りに来る人のため、さらに避難小屋が必要になる。これは登山の裾野を広げたのではなく、来る資格と必要がない人が押し寄せたため登山の領域が減少しただけのことだ。魅力ある領域が減れば、若者は山に寄りつかなくなる。

99年に仙丈ヶ岳避難小屋を建設した長谷村は、登山者の増大が仙丈カールの汚染の原因であり、「地元の住民が惹起したものでもなく……憤りすら感じ」ているという(西村美里、「自

然保護と自然エネルギー利用による共生—南アルプス仙丈岳避難小屋の方向性」、『山のトイレ事例発表大会資料集』、日本トイレ協会、00年、109頁)。しかし登山者の増大は、彼らが自ら好んで作った南アルプススーパー林道によってもたらされたものだ。そしてその汚染を防ぐために前の小屋よりはるかに大きい小屋を国庫補助金と過疎債で作った。始めは、水場汚染を未然に防ぐため仙丈カールのテン場のトイレを改修しようという話が、2億円をかけた巨大小屋になり、付近は幕営禁止になってしまった。コスト意識は全くない。これ程の巨大施設を作るのと、小さなトイレと管理人を置き料金を徴収するのと、どちらが地形を壊さないか、環境を守るか、安上がりか。土建国家らしく、最初の建築費を回収しなくてもいいから、このような無駄がまかり通る。この小屋も先の例と同じく、2食つきでは普通の小屋と全く変わらない料金になる。避難小屋とのことで料理を作らなくて良いから、かえって利益率は高いだろう。03年には内密でとのことで、2食つき宿泊を始めて問題にならないのは公営ならではのことだ。04年には、いつの間にか「避難」が外れ、目出度く仙丈小屋になって食事を提供していた。大きな台所が始めから作られてあったのは、大した先見の明である。小屋の周りは平坦化され、テーブルも置かれ、テン場だった頃よりはるかに広い面積が平坦化、裸地化された。荒川小屋新築時も、周辺が大きく裸地化されても公営ゆえ許される。どこまでも官尊民卑であるから、政官財癒着せざるを得ない。環境省に尋ねても梨の礫。15基ある風力発電用風車は、相当風が強くても3基しか回らない。これでは過酷な環境にも耐えられると、メーカーが誇るはずだ。回らないのだから壊れない。小さな地元負担で大きな事業ができるという補助金行政は、その甘い汁を吸うため採算性を無視した不要な工事を産み続け、その地元負担分の蓄積が地方の財政を破綻状態に追い込み、今や政府の補助金を消化するのも苦勞するというのに。

公営の避難小屋だから、雷を避けるためや疲れ果てた時等は無料で休ませてくれたり、泊まらせてくれるのだろうか。そんな時にお金を取るような避難小屋なら、料金を払わなければ乗せてくれない救急車だ。しかし実際には、お金を払わなければ緊急の場合の避難もさせてくれないのだから本来の使命を忘れている。売店化した入り口の雰囲気は、雨宿りも遠慮させる。

しばらく前まで南部の小屋は、公に食事を出している所は大変少なかった。しかし97年からは一気に2食つきで宿泊のできる小屋が多くなった(横窪沢小屋、茶臼小屋、聖平小屋、荒川小屋)。その頃から、南部を巡る有名新聞社系等のツアー客が激増した。驚くことに定員が宿泊しただけで食堂が狭いため食事は4ラウンド、時に6ラウンド(光小屋だけは最高2ラウンドに収めている。食事時間外は自炊者の食事やラウンジとして使われ、喫茶店化してお金を払って飲食しない人を閉め出す他の公営山小屋とは大いに異なる)にもなり、毎日毎日同じカレーあるいは冷凍豚カツを出すだけ、その上お代わりのない所(01年までの聖平小屋。水

カレーで有名な北部の馬の背ヒュッテはこの伝統を守っており、朝食は夕食時に渡される弁当)さえあるのだから、利益率の高さは全ての企業のお手本となろう。まともな登山をしようとする人に3ラウンド目の食事でも厳しい。実際、予約して入山したパーティー間の、食事の順番を巡るトラブルがある。せめて2ラウンドで済ませよう、ツアー団体の予約受付や受け入れを止めるべきだ。それが、運営している会社の社会的責任だ。行政は会社に何を遠慮しているのだろう。人混みは登山に似合わない。すれ違いもできない。下界の噂話の続きをすることが山の楽しみになってしまったかのようだ。公営の山小屋であれば、少なくとも光小屋並の制限を設けなければ、日本の地形ではどこまでも観光客が入ってくる。登山の領域がなくなってしまう。そのようにしたいのなら、山小屋ではなく普通の宿として運営し、サービスレベルも同等のものにすべきだろう。東海フォレスト系は各山小屋を無線で結び、どんなに到着が遅くなったツアー客にも食事を提供する。早出、早着きという登山の常識を自ら崩しておいて、最近の登山者はと皮肉るのは本末転倒だ。夕方まで行動して、それから精進落とし無礼講の宴会にいそむ団体ツアー客が最近異常増殖しているのは当然である。小屋を当てにしている人は、天候の変化に関心がなく、町のように夕方までにゆっくり着けばよいと考えている。雷は午後が発生することが多いので、昔は昼頃までに行動を止めるのが常識だったのに、山を知らない東海フォレスト系バイト小屋番が山の文化と常識を破壊する。

ヨーロッパでは、きちんと基準タイムが定められ、ガイド登山ではその時間内に登ることができないなら登る資格がないとされ、遅ければ途中で下山させられる。トレーニングして再挑戦すべきだということだ。海外のトレッキングルートより道も天候も厳しい日本の山岳ルートでも、その程度の制約は必要だろう。寒い吹き降りの日に、鎖に繋がれた奴隷のように首をうなだれ歩いているツアー客を見ることはまれではない。鎖に繋がれていないと分かるのは、あまりに一人一人がばらけていることからだけだ。ガイドブックの標準タイムは、昔より体力レベルが落ちているといっても、装備がよくなり軽くなっている現在でもよい指標になるだろう。本来、登れない歩けない人まで山小屋(の食事)があるからといって入山させ、つまらない遭難が起きるといって、さらに遊歩道化させるのは正しい対応とは思えない。こんなことから、どこまでも汚らしく整備され、若者にとって山が魅力的でなくなる。どこまでも赤ペンキとロープを張って平然としていられるのは、観光地の夜のライトアップと異なり汚らしいだけだ。

山のどんな展望より、ライトアップされた眺めが美しいことは確かだ。ライトアップされた名所、観光地は誰が見ても素晴らしい光景である。実際、どんな満天の星より3000mからの夜景「地上の星」の方が数百倍ダイナミックだ。ライトアップされない自然など、炭酸の切れたビール

以下と誰でも認めている。だから、これ程ライトアップがもてはやされる。闇夜の花見など誰も好まない。闇の中の光は、雪のように汚れを隠し、美しさだけを引き立たせる魔性のスパイスだ。しかし、本当の自然は、ライトアップされていない自然の筈だ。灯りを消して自然を楽しもうという一部の観光地の試みも、すぐ横に明るく暖かで快適な文化的な生活環境が用意されているからこそ楽しめる余興に過ぎない。フィンランドの冬、サウナで火照った身体を湖に沈めるほどの快感も無かる。

冬山に3週間入っていて下山すると、林道脇の朽ち果てたあばら屋さえ何と美しいものかと感じられるようになる。見慣れたはずのゴミゴミした町の風景、色彩が何もかも美しすぎる。やはり、人間は人間が、そして自ら作り出した文化的な生活が好きだ。だからこそ美しい。人間の作ったもの、人工物は自然より美しいと思知らされる。不快なのは、車の排気ガスを浴び吐き気を催すことだけだ。毎日雪を溶かした水ばかり飲んでいて、下山後、蛇口から水道の水を飲むと、しばらくはなんて爽やかな喉ごしでおいしい飲み物だと感じられるようになる。山小屋を遠くから眺めて、山の景観を壊す異物ではなく、おとぎ話のお城のようにきれいと感じるのが普通の登山者ではないか。山小屋は山の景観にとって不自然な物であるはずなのに、妙に美しく感じるのが人間の本性なのだ。

ヒトは誰でも剥き出しの自然より文明が好きだから、ほとんどの人が文化的な生活を好む。登山者も同様だ。だからこそ、自然に敬意と恐れをもって接しなければ、どこまでも山に人工物を持ち込み文明化しようとする。しかし、南極の基地から雪上車で極点向け旅をする人が見る自然と、南極をノンデポで歩いて単独横断している人の感じる自然が同じとは思えない。文明によって作られた物の介助が少ないほど、実感をもって自然を味わえるのではなからうか。それが、本当に自然を体験するということだ。面白さだ。

本来、山の美しさは不安感のなかにこそあるもので、遊歩道を気楽に辿ることで味わえないものだ。猛吹雪の切れ間に、一瞬見えるからこそ白い山には圧倒的な存在感と美しさを感じる。自然の猛威に耐えているから、自然の美しさを実感できるのだ。自然が穏やかで優しく、何の不安も与えないものなら、それは自分にとってビデオの映像程度の係わりしかない、存在感が希薄なものとなって当然だ。お金をかけるリスクなしにギャンブルを楽しめないのが、人間の性ではなからうか。

開発し尽くして、未来のヒトの山の楽しみまで消費し尽くすのは、浅ましいことだと思う。

さて、登山者の中にはあそこのカレーは美味しかった、豚カツは絶品と感謝する人がいる。公営の山小屋を無料で借り、登山者の殺到する期間だけ営業しているだけなのに、北部の山小屋より料金がなくて料理が悪いのに、それを有り難がるとは悟りを開いているのか、無知なの

か、山は昔ながらのワイルドさが面白いと思っているのか。北部の山小屋が刺身付きの懐石風料理を出せば、山に来てまで刺身は不要と、山ではカレーが一番と揶揄する人までいる。業務用の何ヶ月も腐敗しない大型プラスチック袋入りの総菜を何種類も盛り合わせたものをご馳走と勘違いしている人も多い。偏食の保育園児並みの反応である。もちろん料金が高いから文句を言っているのではない。その小屋は料金も安いのだ。確かにカレーも豚カツも、山では美味しいだろう。しかし、豚カツも刺身も冷凍であれば同じだ(最近では、刺身さえ付ければという山小屋も出てきたが、羊頭狗肉の本末転倒)。安易なカレーや豚カツを出す、維持費用がほとんど不要な公営小屋料金が、懐石風料理を出す通年営業(冬期は完全に赤字だろう)する民営山小屋の料金より高いとは、登山者は一般のものに対するように、サービスや内容にふさわしい適切な価格設定を求めるべきだろう。南部の公営小屋は行政の指導で一律の高価格制を取っているという。もちろん口頭だろうが、それぞれの小屋の自助努力を無にするものだ。立地やサービス内容によって料金を変えても、競争相手はいないのだから何ら問題ない。素泊まりやテントの様な、基本的なものだけ光小屋や七丈小屋のようにリーズナブルに設定すれば、公営山小屋としての社会的責任を果たすことができる。気持ちよく稼ぐことが出来る。現状は、観光客には施設、サービスが悪過ぎ(それも一興として、楽しんでいるマゾヒストが多いが)、登山者には料金が高過ぎる。これでは、一躍千金を狙う山小屋運営者が喜ぶだけだけのものだろう。しかし、それによって本当の登山者を減らしているのは憂うべき問題だ。

南アルプスの典型的な酔いどれ小屋番の支離滅裂、人を食ったほら話を、浮世離れして世俗を忘れさせてくれるとか、仙人のようだと有り難がる人もいる。そんなと太話を客を煙に巻く前に、最低限のホスピタリティーを持ち身をもって人徳を示すのは、客商売を営む者のマナーではないのだろうか。近くに雷親父がいなくなったためか、独断的に人の道を説く小屋番の妄言を哲学者のようだとか敬う客は、しばしば食客として、舎弟としてそれなりの待遇を受けゴロゴロしているのは「割れ鍋に綴じ蓋」である。あるいは、評判の悪い小屋番にひどい扱いを受けても、実際はどうか分からないと一歩引いて、のど元過ぎれば的な腰砕け反応をする人もいる。絶対的権力を持つ小屋番は、命どころか暴力も振るわないのに、なぜ正しいことを正しいと主張できないのだろう。それは、喧嘩しようといっているのではなく、静かに丁寧に話せばよいことだ。長いものに巻かれる、事なかれ教育を受けているから、全く交渉、妥協してよりよき解決方法を求めるという民主主義の面倒な手続きを知らない。雑誌に、ある小屋番に対する極めて紳士的かつ良識的な投書(青木範子、「なにも怒鳴らなくても……山も人もさまざま」、『岳人』、97年11月号、195頁。小林幸雄、「小屋の管理人に私も不愉快な思いを」、『岳人』、98年1月号、194頁)が載った。しかしすぐ、中立性を見せるためか、パロディーなのか分からない

が、斜に構えた小屋番擁護の投書まで載せる(渡辺鴟助、「小屋の管理人に私は愉快的思いを」、『岳人』、98年3月号、200頁)。「小屋の人に声をかけると、「まだ早いから先まで登ってくれ」と、相手にしてくれない。小屋の入り口には「休憩お断り」の貼り紙、昼食をこの小屋で食べるつもりでいたヤマケイ組は、小屋の前で、雨のなかの立食パーティという仕儀になった。山にはいろいろなルールがあるはずだが、官僚もどきの不人情なルールを山にもちこむのは、いただけない話だ。」と形容された小屋番だ(不破哲三、「終わり晴れば雨もよし 南アルプス荒川三山、赤石岳初縦走」、『山と溪谷』、93年1月号、159～169頁)。『岳人』編集子も、単なる言いがかりでは無いと考えたから投書を載せたのだろうに、、、。行政も、このような事なかれの反応をまっとうな批判と併記することにより、何の判断もせず責任をとることを拒否する。

あるWVの記録(小林直子、「南アルプス大縦走」、<http://wangel.mercury.ne.jp/2001/01southalps.htm>)でも、彼らの先輩が小屋番とトラブルを起こした話を聞いていたので、彼に対し「細心の注意を払って」接したところ、「一見恐そうで言葉も乱暴」なのだが「笑って温かく迎えて」くれたと喜々として書いている。そして、「きちんと礼をもって接すれば全然悪い人ではない。というよりむしろいいおっちゃん」と評価し、「トラブルにおける非はこちら側にあったと思わざるを得ない」とまでいっている。子分か下僕になったかのように卑屈な態度で接すれば、乱暴な言葉にせよ温かく迎えてくれたということだ。そんなに神経を使って感謝しているとは、事なかれ主義がプライドの欠片もないのか分からない。勘違いも甚だしい奴隷根性の弱腰の対応だ。まるで小屋番は「サービス業」ではなく「ご主人様業」である。小屋番は、少なくとも客商売として節度ある対応をすべきであり、看守か牢名主のような態度は間違ってもすべきではない。たとえ、たまに理不尽な客がいたとて、だからといって一般社会でも全ての人に対して最悪の人に対するように接するのが許されないのと同様、小屋番はサービス業として郑重に客に接して当たり前だ。かの小屋番の名誉のために書いておくと、彼は仲間内では大変穏やかでよい人だと評価されている。悪質な登山者に対応している内に、あのようになってしまったとのことだが、それでは、まともな良識ある大人とは言えないのではなからうか。ましてや、プロではない。例え、急性アルコール中毒で運び込まれ病院内で荒れる人にも、医師は説教をする前に自分の職務を淡淡とこなすように務める、それが仕事だ。全く、小屋番としてのサービス精神とプロ意識欠如である。

山小屋スタッフになるような人は、大抵山小屋の生活が好きでも、本当の登山も理解していない、好きではないことも問題だ。電気のある暖かい家と食事がある限り、どこにいてもそれは町にいるのと殆ど同じだから、山小屋の生活と登山者のテント生活は似て非なるもの。山小屋生活をしているからといって、山や登山を知っているとはいえない。南極基地で越冬する人が冒

険家でないのと同じだ。経営努力しなくても立地条件でお客はやってくる。競争相手がいないので、客にどのような対応をしても受け入れられる。そこで、小屋番の牢名主化が起こる。客は、文句の一つでもいえば寒空に放り出されると心配し、媚びへつらうから考えのない人は助長する。牢名主が小屋番の仕事だから、是非、小屋番になりたいと考える人が多くなる。

入り口や壁一面に、細かな注意書きが張ってある小屋もある。まともには読めはしないし、真っ当な客商売ではない。

だから、小屋スタッフ、特に東海フォレスト系がしばしばテント登山者に驚くほど冷酷なのは、マッチ売りの少女を暖炉の燃える暖かい部屋から眺めながら、寒風吹きすさび舞う雪をきれいだねとしか思えない感性と類似だ。風雨の中、ぐしょ濡れになって重荷の歩荷をすることはあっても、暖かい部屋の中ですぐ着替えが出来るなら、雨の中、サッカーでもしてきたようなものだ。テント山行とは似て非なるもの。彼らにすれば、好きでやっていることと思っているだけで、テント山行者からすれば暖かい部屋と食事を見せられ、一層苦しく感じるという、両者逆方向の感性のずれを生じているだけだろう。町では、山で鬼のように見えたスタッフも、想像力がやや不足しただけのごく普通の常識人に違いない。

05年の聖平小屋スタッフのように名札を下げれば、誰がスタッフか迷うこともなくなり、個人としての責任を自覚して仕事出来るかも知れない。現在のように、会社の中での匿名性に守られた小屋番では、責任はおろかまともなプライドは持てないので、時として登山者に威圧的に接してしまうのかも知れない。彼らに名前と責任を、である。それにしても、公営小屋の管理人の中には自分のことを「オーナー」と呼ばせる人もいるが、何を勘違いしているのだろうか。小屋を作った行政はどう考えているのだろうか。

少なくとも自然浄化力の弱い森林限界以上の小屋は、食べ物売らない、食事を出さない本来の避難小屋に戻れと強く主張したい。気楽に展望を楽しみたい人のためには、車で行けるあるいは簡単に歩いて行けるところに展望がよく設備のよい立派な小屋を作り、周辺を整備してハイキング道を通せばよいだろう。それ以上のところには、自立して行動できる人のための避難小屋に縮小すべきだ。

近年、北アルプス横断ロープウェー建設が話題になっている。上高地まで伸ばしたいという。それで、ヨ・ロッパのようにだれでも3000mまで登って、その景観を楽しむことができるようにしたいとのことだ。それでは、日本の地形では登山者のテリトリーがなくなり、山の全てを観光客向けの三流の公園にすることを意味する。ヨ・ロッパアルプスはその上にさらに1000m以上登山者の領域が広がっている、氷河もある。もしヨーロッパを範とするなら、2000m以下の所

に 3000m の峰々を望む展望のよい所を整備してはどうか。そこを本格的リゾートとして開発、オールシーズン人を迎え入れれば、ビジネスとしても成り立つのではなからうか。あまりに核心部に近くは大した展望は得られない。

登山の大きな楽しみの一つは、文明の保護を外れた不便さを個人の力で克服することである。ほとんど登山の本質的楽しみをスポイルするだけの存在である日本アルプスの森林限界以上に立つ山小屋は、将来的には全て撤去すべきだろう。次世代にも整備された観光地の公園化した山だけではなく多少のウィルダネスを残すべきだ。アメリカのロングトレールでさえ 2 食つき宿泊ができるところは例外であり、ルートによってはほとんどない。ヨーロッパの山小屋では、食事つきでもそこには観光客やハイカーは来ない。しかし日本の山では、際限なく汚らしくロープを張ったり、ペンキをつけて遊歩道化した上に食事まで出して観光ツアー客、ハイカーを誘っているのだから、多少彼らが道に迷っても、怪我をしてもそこを整備した人たちが責任を持って救出に当たり、保証すべきだろう。他のアミューズメント施設運営者と同様、当然の責任だ。

千枚小屋、赤石小屋等、東海フォレスト系山小屋の入り口はどこも売店化し、百間洞山の家では入り口の土間はジュースやビールを冷やす水槽が置かれ、熊ノ平小屋の入り口の靴箱は商品展示用の棚にして通行止にしている。公営小屋にもかかわらず、唯でさえ狭い入り口で悪魔のささやきのようなビールやタバコを売るとは、ジムの玄関にビールやタバコの自動販売機があるような違和感を持つ。尋ねられたらビールやジュースを奥から持ってくるくらいの方が、いつもの町の生活、酒宴ではない本物の愉快的体験となろう。しばしば品切れになれば、なお山深いところに来たという風情があり、文明の有り難さと共に山の美しさが一層心にしみるに違いない。要望があるなら何をしてもしないわけではない。山に何をしに行くかということだ。民営ならともかく、行政は何のために、誰のために山小屋を作ったのだろうか。金儲けの前に、山小屋を作った「大義」はすっかり失せている。(06 年より、熊ノ平小屋は玄関から出入りできる。)

南アルプスは、大きい山容と稜線で水が得られることが、北アルプスと大きく異なる魅力の一つだ。だから自然な山旅が楽しめる。しかし小屋の横に水が出ているにもかかわらず、水道の蛇口で給水する所が多くなり、直接沢の水を使わせないようにする傾向がある。それでは北アルプスのようなスペクタクルな展望がない南アルプスの良さを大いに削ぐことになる。ポンプアップする時間は水場が枯れ、その時は有料で販売するのは荒川小屋だ。

自然の流水を使うから、水道水とは違う天然水という実感が得られ、下流に思いを馳せることもできるだろう。町と同じ蛇口では感じが出ない。自然の水場を大切にしようとする気持ちが起きにくい。便利にすることだけがサ - ビスではないはずだ。楽しさ、面白さをスポイルするだけだ。

口の中を泡だらけにして歯を磨き、山でも蛇口からの水だけが飲めると勘違いしている多くの超高年登山者は、魚は切り身で泳いでいると思っているくらい自然離れしていると揶揄される現代の子どもと何ら変わらない。最近の高齢登山者の中には、蛇口からの水では不足で、消毒していない水は衛生的ではないので煮沸した水をくれといって小屋スタッフを困惑させる人もいる。そういう当人達が「ジベタリアン」となって、わざわざ細い登山道の真ん中でどっかり休み、通行妨害して平然としている姿にしばしば出くわす。

ところで、熊ノ平小屋の水場は00年ユンボで大きく広げられ、一般登山者には非常に使いにくくなった。以前からあるスタッフ用に加え、外に建てた居候用の風呂のための水をポンプアップし易いよう改変したのだ。05年には、その風呂は1回、20分、ガス代1000円で、登山者に供されていた。少々環境に対する配慮が足りないのではなからうか。荒川小屋の水場も同様だが、ポンプアップのため水場を改変することは自然の流路を変えることであり、何かあったら水場そのものが失われかねない。それにしても、やることが手荒い。公営の小屋は何をしても許されるかのようだ。民営の小屋ならとっくの昔にお取り潰しである。

三伏峠小屋は、標高差90m下ったところに導水したタンクから、水をポンプアップしている。沢での幕営は禁止されたので、テント山行者は峠からそこまで水を汲みに行かなければならない。峠から200m下った沢の幕営地には、すぐ横にふんだんな水が流れている。峠小屋の営業期間外は、水タンクも撤去されるので水を旧幕営地、沢まで汲みに行かなければならない。他と同じく、このようなエネルギー多用の山小屋運営は、今様とも自然に優しいとも言えない。ふんだんな水のある沢小屋を整備して、峠小屋を撤去する方がはるかにエコだっただろう。

乱暴だった農鳥小屋の主人の態度でさえ、03年から一変してまともな対応をするようになってから、最近特にフォレスト系のワイルドさが目立つ。このように、個人が直接責任を持って運営している山小屋なら、少しずつでも改善される。委託された会社が、バイトに丸投げしてはとうしようもない。そろそろ、行政の管理責任が問われかねないと思う。04年9月、環境省が、国立公園のペット同伴禁止規制検討との報道があった。かの小屋には甲斐犬が5頭飼われ、周辺にライチオウの影もない。両俣小屋でもネコが6匹飼われ、周辺に鳥の姿がない。ネコ好きだけが小屋に来るのではないことが分からないのだろうか。それを知っても行政が何ら手を打たないとは、よほどイヌやネコ好き揃いの方ばかりなのだろうか。それとも、ライチオウも、イヌもネコも同等に愛する博愛主義者なのだろうか。しかし、野生動物のテリトリーにペットを持ち込むのはいかがなものか。山小屋は、誰でも利用できる半公的な施設である。両俣小屋は公営小屋だ。

97年観光化元年から赤石小屋、千枚小屋、荒川小屋が秋までの営業となり、秋にも多くのツアー客が入るようになった。92年7月には便ヶ島登山小屋ができ(96年まで、03年には同じ場所に聖光小屋ができた)、岳岳がぐっと身近になる。しかし93年8月16日、畑薙第一ダム近くの林道が大崩壊したためバスが不通になり、97年にトンネルが開通するまで榎島からの入山は押さえられていたが、その年一気に南部の観光化に拍車がかかった。96年9月、二軒小屋から荒川へのルートが大崩落し(99年5月再開)、きれいな回遊ルートが取れなくなったのも問題なかったようだ。便ヶ島登山小屋(03年から民営の聖光小屋として営業開始)が97年から閉鎖されたことの影響はないらしい。また93年の鳥倉林道ルート開通、94年登山道整備以降そこが三伏峠への主要登山口になり登山者が激増した。

その頃から小屋の営業期間がひどく変わり出した。南部の小屋は以前、ほとんど全て8月末までには営業を終え後は登山道でカモシカが遊ぶ静かな山に戻った。それが97年からは赤石小屋、赤石岳避難小屋、熊ノ平小屋が9月30日までとなった。98年は赤石小屋、千枚小屋は10月18日まで、荒川小屋は9月30日に、熊ノ平小屋は9月15日まで。96年秋の熊ノ平小屋は改装中で、8月31日までの営業といいながら10月初めまで工事現場の片隅を素泊まり料金で泊めていた。百間洞山の家も8月31日まで営業とのことだったが、それ以降も小屋番が入る時だけは、冬期開放のスペースを素泊まり料金よりやや安い金額(2000円)で泊めていたとのこと。それらはまともな素泊まりのサービスを受けられる状態ではないのでおかしなことだった。以後、毎年のように営業期間が突然大きく変更されるので注意が必要だ。

トイレの改善は著しく、不快なものは少なくなった。南部で水洗なのは荒川小屋、百間洞山の家、熊ノ平小屋、タンク搬送式は赤石岳避難小屋、小河内岳避難小屋、94年には中岳避難小屋にも新築された。しかし、その水洗は汚物が水により直ちに目の下から運び去られ見えなくなるだけのことであり、旧来の地下浸透式と同じ自然の浄化作用を待つだけのもの。すぐ水に流されては、便の輪廻転生が実感できず、問題の本質を忘れさせるだけだから一層罪深い反工トイレだ。タンク搬送式は後ほどヘリコプターで運び下ろすものだから、そこを汚染することはないだろう。しかしそれらの小屋は営業しない時期に無トイレ状態になってしまう。水洗式やタンク式のトイレを維持するためには労力がかかるのだろうが、この点では地下浸透式の方がました。聖平の水洗トイレも04年から使われ始めたが、この標高2200mの寒さできちんと浄化されるとは考えにくい。聖平にはまだ旧トイレも残っている(06年秋撤去)。三伏峠小屋も、04年から一部水洗トイレ化されたがポットトイレも改築され残っている(テン場代は99年から東海フォレスト系に合わせ600円)。百間洞に残っていたトイレは、埋められイスとテー

ブルが置かれ、熊ノ平のものは撤去され、荒川小屋にはまだ旧小屋のトイレが半ば壊れ残っているが、管理者のいない時のことが全く考えられていないことは手抜きだ。

99年には新品同様立派な北沢峠のトイレが簡易水洗トイレに建て替えられた。前のものも十二分にきれいだったので建て替えられたことにも気づかないくらいだが、季節外は浄化槽から悪臭ふんぷんである。01年には北沢キャンプ場に1995万円かけ簡易水洗トイレ、北岳山荘に1億2000万円かけバイオトイレが作られた。02年シーズンからは、ディーゼル発電による排ガスと夜間の騒音が環境への配慮を欠いているとして、長衛荘と北沢峠公衆トイレのため2km離れた沢に5500万円かけた水力発電所からの電気が使われ始めた。それでもまだディーゼル発電機は動いている(案外静か)。それに対して聖平小屋や荒川小屋の発電機の爆音はすさまじい。トイレが改善されたという小屋は、どこも大なり小なり発電機の音で完全に山の静寂を壊している。環境に配慮するといってもトイレにしか興味がならしい。環境に配慮するというのなら、巨大なトイレを作るのではなくまず水のポンプアップを止めるべきだろう。北岳山荘の下250mの旧北岳小屋跡には水場がある。また車が入る場所では、以前のくみ取り式でよいのではないか。シーズン終了後にくみ取って便槽を空にしておけば、これほど高価なトイレを作る必要はなかったはずだ。山でも、コストを無視してまで町と同じ快適さを持つトイレが必要とは思えない。全くコスト意識が欠ける。環境、エコをお題目に、その地域の実情に合わないトイレ建設が続くのは、相も変わらぬ補助金行政の欠点だ。根本的に解決するつもりがないから全ての巨大施設はそのまま、トイレだけで問題を解決しようとするから何もかもがダゲさ、巨大になり結局エネルギー消費が増えている。建築し、維持するのに一体どれほどのお金、エネルギーが必要だろうか。それは本当のエコではなく、問題の本質を隠し大量消費社会を続け、問題を先送りするだけに他ならない。多額の公金投入による快適なトイレは、近い将来に受益者負担として跳ね返ってくるのが確実だ。いや、もうその気配はある。ハヶ岳のテント代は02年から1人1000円になった。本四架橋や東京湾アクアラインのような高料金になり、山に閑古鳥が鳴くかもしれない。そして、コストを無視して飛行場は作ったが、その費用を回収するため着陸費が法外なものになり、利用する飛行機がほとんどないということになるだろう。交通アクセスを整備し山小屋という名の大きな宿泊施設を作っておいて、オーバーユースだ自然破壊だ環境を守れなどというのはマッチポンプ以外の何ものでもない。今後の公共事業は環境、トイレに向かい、日本中が新築トイレで満たされるまで立てられ続ける予感がする。「日本国や、浜の真砂は尽きぬとも、世に公共事業の種は尽きぬ」。環境問題をトイレ問題と矮小化し登山を観光と読み変え施設整備に邁進する環境庁は、00年1月の省庁改変で「観うんこ省」と改称すべきだった。

なお、民営にも関わらず仙水小屋ではトイレ問題が話題になる前から、便のヘリコプターによる運び下ろしをしている(テン場代 400 円)。00 年には南御室小屋がバイオトイレ化された。それらの小屋の料金は逆に低い。04 年には、光小屋にまた新たなバイオトイレが登山道を塞ぐように建てられ、山小屋は新トイレと旧トイレの間に挟まれた大きなトイレ管理棟になった。

しかし、どのバイオトイレも不自然な不快臭がする。ポットン式の何と自然なものかと、その人間的香りの嫌みのなさが懐かしいくらいだ。

自然浄化作用の弱い森林限界以上の場所では、特にオーバーユースが問題となり、既に北アルプスでは、第一次登山ブーム以降河川の大腸菌による汚染が問題になっている。近年、遅ればせながら南アルプスでも河川の大腸菌汚染がいわれるようになった。

だからといって、ルート上の各所にトイレを置き、登山道をトイレ街道にしてもよいとは思えない。大便の持ち帰りは日本の気候では現実的ではない。97 年から始まった(00 年 7 月終了)南アルプス倶楽部(04 年 3 月解散)のスタンドプレーは、インパクトはあったものの山岳環境の問題をトイレ建設の問題にすり替えてしまった嫌いがある。広河原を拠点とする NPO 法人であれば、自然破壊の元凶、南アルプス林道の廃道化というような海外の過激な自然保護団体みたいなきまでは望まないものの、まず山小屋前の自動販売機の撤去だろう。広河原山荘、長衛荘、北沢長衛小屋(現、北沢駒仙山荘)、大平山荘のような、山小屋前の自動販売機はいかがなものか。それら、車が玄関横付で、車が入らなくなると営業しない小屋を変えるような隗より始める運動をして欲しかった。なお、長衛荘は 99/00 年シーズンから年末年始の営業を始めた。スタッフは戸台大橋から 20.6km の林道を車に乗って入る。そのためだけに除雪が行われるのだから、除雪費用の潤沢さにただ驚くだけだ。

現状ではこれらの小屋は山小屋ではなく普通の安宿だが、名前が山小屋ということだから非常に低サービスでも許され、逆にそれが魅力とされる。車横つけの小屋は、地元の芦安の民宿、旅館、ペンションと価格とサービスを比較して評価すべきだ。車が入らなくなれば営業しないのでは山小屋とはいえない。03 年、休業になった国民宿舎、広河原ロッジは 04 年撤去され、新たな宿泊施設が建設される予定だったが、さすがに中止された。それを作れば、付近が南アルプス市営の宿ばかりになってしまうからだろう。上物は減価償却の必要ない公共で作っても、採算はとんとんだらう。土建業者以外には、投資金額に対し著しく効率が悪いビジネスだ。ほんの少しの山小屋スタッフの給料を捻出するためには、大きすぎる投資だ。補助金がなければとてもできない。「誰の腹が痛むわけでもない」と、湯水のように補助金を使い公共事業をする人は、国民に借金のつけ回しをすることで生きている。

通年営業すれば山小屋として認められよう。コンサートするのはこの次である。山小屋という

社会的責任を担う施設の管理人をしているから、山の専門家と思われがちなのも問題だ。どの山小屋のスタッフも、そこで働いているからと登山の熟達者のように振る舞うが、本格的な登山経験を持ち登山者の気持ちを理解した運営をしているのは、南アルプスでは光小屋、仙水小屋、七丈小屋のスタッフだけだ。だから逆に、猛々しく一般登山者を怒鳴りつけ、弱みを知られないようにしているに違いない。スタッフのほら話という間違っただ登山情報も害毒である。登山者を萎縮させるだけだ。

山小屋前まで林道が開通してから車に乗って入山するようになっただけなのに、世間並みに愛想がよいというだけで大変評判が高い、山に一度も登ったこともない小屋番もいる。その評価は雑誌やガイドが作った伝説だが、これは一般の人の山小屋スタッフに対する評価基準の低さをよく表しているともいえる。独占的、特権的営業と、「見ざる、聞かざる、言わざる」の山岳ジャーナリズムとうまく乗せられた事なかれの利用者が、横柄、尊大で思い上がった山小屋スタッフを増殖させたのかもしれない。

NPO 法人、南アルプス研究会は長谷村役場に事務局があった。このような行政主導のNPO は、日本らしく行政の下請けになって、その施策の露払いの役割を受け持つのだろうか。独立性、中立性が非常に疑問だ。行政は、仙丈ヶ岳避難小屋 2 億円、北沢峠下の発電所 5500 万円等々のように NPO 法人とか環境保護団体とか装い柔らかい組織のお墨付きを頂き、新たな補助金エコ土木事業を続けるのであろう。99 年 4 月全壊した白根御池小屋は、04 年から総事業費 3 億 6000 万円かけ 05 年 10 月、新しい山小屋が完成した。その小屋番に、旧芦安村の管理職だった人が収まったのは想定どおり。観光協会も行政の組織なのか社団法人という独立した組織なのか、官業癒着の典型なのかさっぱり分からない。南アルプスには、このような正体不明のものが表面的に運営することにより、行政の管理責任を曖昧にし、協会内部の個人的利益獲得の場になっていると思われるようなものも多々ある。

個人の自覚を求めるためか、塩見小屋のように一人づつ便袋を渡すのはやりすぎだろう。便袋だけでどれほどの量になり、ゴミになるのか。男性の小は別に場所がある。女性は小でも 1 回毎、便袋を買わなければならない。せいぜい、1 日毎まとめて処分すれば十分ではないのか。シーズン中は、小屋の横に巨大なテントを 2 張り立て宿泊させているのに、97 年から水場を汚すからと幕営禁止にする前に、大団体ツアー客を受け入れるのを止めるべきだ。それにもかかわらず、最近の登山者は山の話ができないと質の低下を嘆く(石川徹也、「山小屋のオヤジ」に憧れて、「岳人」、99 年 6 月号、17 ~ 18 頁)とは、自らが望んだ当然の結果ということを理解して頂きたい。

熊ノ平小屋は公営であるにもかかわらず、トイレ維持のためのカンパを求める箱があった。最近、宿泊代、テント代にトイレ使用代は入っていないらしい。許可を受ける前にテントを張ると10000円徴収との標識があったこともある。

何はともあれ、大腸菌の問題だけに注目して、登山者の増大による登山道の荒れ、生ゴミの増加といったオーバーユースの問題一般に言及しないのは、山岳ビジネス上致し方ないのかもしれないが、抜本的解決から目をそらす勝手な論理だ。

浄化槽式バイオトイレはどれも、不自然かつ不快な異臭がする。北岳山荘のものは、遠くからでも自然とも化学的ともいえない悪臭が漂う。15基全てが稼働すると、1ヶ当たり800Wのヒーターと750Wの攪拌用プロペラの計1550W、トータル23250W。大型発電機がいつも回るさく回り、排気ガスを吐き出していることの影響は如何ほどか。

巨大山小屋から出る大量の食べ残しと調理時の生ゴミ、食器を洗うための洗剤はどれほど環境を汚染しているだろうか。持参した食料だけなら、食べ残しもなく、食器も禅寺のように白湯ですすいで飲み干す「赴粥飯法」は、昔の登山者では当たり前だったが、小屋の食事頼みの超高年登山者は平気で食べ残しをする。処理に巨大な施設と大きなエネルギーを使うトイレだけでエコと免罪され、食べ物を調理し、後片づけすることがどれほど大きな環境負荷を与えているかには思いが至らぬようだ。これは、因果が目に見えにくくなった大量消費社会における、自然離れた超高年登山者の典型的浅知恵だろう。

山小屋で食事を出したり食品を売ったりするなら、残飯や調理時の生ゴミを便同様完全に処理し、ダイオキシン排出の恐れのある小型焼却炉は直ちに廃止すべきだ。山小屋でのゴミ処理は、せいぜい、焼いてその灰を埋めるのがいい方だ。00年1月、ダイオキシン類特別措置法が施行され、02年12月、規制が強化され高温で完全燃焼せずダイオキシン類を排出する小型焼却炉にも適用された。一時は、小型家庭用焼却炉の普及を推奨し、ゴミ減量を計った行政は、一転、焚き火さえ禁止する方向に動き出した。山小屋のゴミ処理が、便と同様の大きな問題であることは町の生活を考えれば分かる筈だ。山小屋の食事には少なくとも、それらの費用も上乘せすべきだろう。便の問題は、山小屋における食事提供の結果大きくなった問題であり、それは、エネルギー多消費であろうと表面的には解決されつつあるのに反し、肝心の食事提供自体の環境負荷は考えられていない。山小屋での食事料金には、それらの処理費用もきちんと組み入れて当然だ。もちろん、デリケートな高山帯にエネルギーを大量に使う処理施設を作ることは、根本的解決の方向とは逆である。大腸菌の調査以上に、小屋周辺のダイオキシンを測定する必要がある。04年から仙水小屋では生ゴミ全てを運び下ろしているという。

ところで二軒小屋ロッジ、榎島ロッジ、赤石小屋、千枚小屋、荒川小屋、百間洞山の家、熊ノ平小屋に2食つき宿泊をすれば「施設利用券」を買って路線バス終点から送迎バスを利用できるという。施設を使用しても素泊まりの人は利用できない。ましてテントはいわずもがな。そこでテント利用登山者との間で様々なトラブルがある。しかし一般車を閉め出した市道を独占使用し送迎バスで下りた所にある小屋ではなく、そこから数時間あるいは1日以上かかる所にある小屋の宿泊者も利用できるとは体のよい白バス運行としか考えられない。このような白バス運営が許されるとは不思議だ。北部でも02年までの数年間、広河原から両俣小屋まで白タクあるいは一般車の乗り入れが行われていた。

有名登山家たちの記録では、明らかに進入禁止の林道を利用した山行を行っている。いつもは入下山の経緯を書かないのにもかかわらず、たまに数km林道を歩いただけで非常に大変だったなどと書いているからバレてしまう。おまけに許可を受けて車で入った時は、大げさにその旨言い訳をするから正直だ。そのような記録を読んでも、林道歩きに半日もかかっては、一般登山者は簡単に登れない。これ見よがしの記録を出すことは遠慮していただきたいものだ。気楽に自慢する前に、一般人も林道を利用できるよう尽力して欲しい。このような特権的登山を重ねているような人たちに、普通の市民として、登山者としての判断力、批判精神がないのは当然だ。

田代の民宿は堂々と宿泊者から料金を取り、登山口までの送迎をしている。東海フォレスト関係者のガイド登山でもその林道ばかりか、千枚小屋直下まで林道を利用した登山をしている。寸又林道でも同様の特例が行われているようで、それらの差別を憤った記録がネット上にもある。県や営林署に問い合わせても、そのようなことはないとのことだが不思議の国の日本である。現状では観光業者が観光客の送迎のため公道を独占利用していることになる。2食つき宿泊者は、厳しくいえば観光客であり登山者ではない。行政は登山の安全のために山小屋を建て、テント場を管理しているはずで、その本来、正統な利用者であるテント山行者や素泊まり登山者でさえ送迎バスを利用できないとは、観光と登山の扱いが逆転している。一般車にも開放するか、全ての人を乗せるかそれとも環境に配慮して全面通行禁止にすべきだろう。林道を歩くのを嫌っているのではない。不公正、不公平を問題にしているのだ。

東海フォレスト運営の山小屋の素泊まり料金が公営にもかかわらず食事つきに対し非常に割高なのは、実質的には送迎バスの運行費用まで一般素泊まり登山者が負担していることを意味する。公営小屋を無料で借り、素泊まり料金をビジネスホテル並みにしながら、彼らの提供するサービスは殆ど食事だけだからだ。彼らは、公営小屋としてのまともな素泊まり料金と自分たちの提供する食事の料金、送迎料金をはっきり分ければ、痛くもない腹を探られることもなく気

持ちよく料金を徴収できるだろう。これではツアー観光客だけ増え、一般登山者が激減するわけだ。ある小屋で、宿泊者の小屋受付名簿に自己申告した年齢の平均が65歳と聞いたが、将来が心配になる。東海フォレストは全く一般登山者の気持ちを理解していない。彼らは日本の登山文化を消し去ろうとする。そのような者に運営を委託するとは、行政は登山をどのように考え、誰のための山小屋を作ったか大きな問題だ。

00年から寝具つき素泊まりだけになり、料金は4500円一本になっていたが、03年からは一部を除き寝具なし素泊まりが復活した。その料金は3500円、寝具は1000円。そして、04年には寝具なし素泊まり4000円、寝具500円になっている。しかし、食事つき料金に対して素泊まり料金は高すぎる。少なくとも、食事相当分(3000円)との比を逆転させるべきではなからうか。サービスの殆どが食事提供なのだから。それは、食事の質がスイスの山小屋並みであれば妥当な料金だ。もちろん食事の質が低ければ、料金はそれなりのものにすべきだろう。

03年からは、避難小屋あるいは素泊まりでも送迎バスを利用できるようになっている。宿泊の前金として「宿泊施設利用券」を購入すると往路のバスに乗れ、宿泊した小屋の領収書を持っていると復路のバスを利用できる。その券は宿泊料金として利用できるが、3000円も前払いすることは、食事つきにしても4割もの金額であり、明らかに小屋利用を誘導している。それは営業努力という一面もあるだろうが、一般車進入禁止の道路を専有利用した上、テント使用者が利用できないことを鑑みれば、非常にうさんくさく反発をかうシステムだ。テント利用者でも施設利用券を購入すれば往路のバスに乗れるのだから、路線申請してない乗り合いバスともいえる。宿泊した人から小屋の領収書を譲って貰えば復路のバスも利用可能で、そのようなことも実際行われる。バス運行していない側から入下山しても宿泊料金が同じなもの、引っかかる。すっかり路線バスとして分離、明朗会計で気持ちよく儲けて欲しいものだ。林道を独占使用した送迎バスにより小屋利用を推進して、テント利用者を排除することも不愉快だ。一部関係登山家は、それら林道に縦横無尽に車で入り、テント山行を行っているのだから不公平感が募る。少なくとも、記録は一切出すべきではない。全ての車の林道利用を許すなら、そのような送迎バスも我慢しよう。しかし、一般路線バスとして認可を受けるか、環境を考え一般車立ち入り禁止を進め送迎バスや一部特権的利用を止めるべきだと思う。

06年7月19日、静岡県職員2人を含む静岡県勤労者山岳会の3人パーティーの遭難が報道され、7月22日県警ヘリコプターによって救出された。彼らは7月14日、一般車が入れないはずの二軒小屋まで車で入り、7月17日に下山する予定だったという。この事件が報道されたことにより、県の職員は一般車進入禁止の林道を使って登山をしている実態の一端が広く知られるようになった。県に通行許可について尋ねても要領を得ない。彼らの通行がいかなる理由で許可されたか是非公開して頂きたいものだ。

また、避難小屋に泊まっても送迎バスを利用できるとは、避難小屋の一般小屋化ではなからうか。半ば、避難小屋宿泊を予定に入れた山行を薦めているかのようだ。これでは、避難小屋の間にもう一つ避難小屋が必要になる。"Less is more"である。半世紀前のイメージで語られる南アルプスは大きい、現在では交通アクセスの整備、装備、食料の軽量化によりごちんまりした山域に過ぎないことを、この本を読んだ人にはよく理解して頂けるはずだ。

最後に、送迎サービスのない南部公営小屋も同じ宿泊料金とは、これもおかしい。これでは東海フォレストの手荒な運営すらよく見えてしまうのも事実だが、テントを邪険に扱わない点は評価できる。

80年6月北沢峠まで開通した(翌年からバス運行)南アルプススーパー林道により、バスが運行されている間は大混雑、シーズンオフは秘境と化し、シーズン中の喧噪を支えた建造物や道路は廃墟のように不気味だ。現代文明の来るべき未来を見るようで一見の価値がある。林道を維持するための費用は、バス収入よりはるかに高いのだから環境と登山そして地元の振興のために廃止すべきだろう。本来の目的だったはずの林業にもほとんど使われず、地元民でさえ通過できない林道を維持するためにかける費用は、本来の地元振興に使えばよい。確か、バスは一回に一台しか出さない約束が、全ての客を乗せるため何台でも出しており、98年の夏山シーズン前GWからは戸台から歌宿まで運行するようになって完全に観光道路と化している。02年2月施行された道路運送法の改正により、バス路線廃止は6ヶ月前に届ければよいことになったから実行は簡単だ。夏山シーズンに塩川までの登山バスは05年で終わり、06年からは鳥倉林道へ登山バスが運行されている。

南アルプス林道は03年の大崩落でその年全面通行止めになり、翌04年からはマイカー規制されるようになった。05年には奈良田側の南アルプス公園線もマイカー規制され、バスやタクシーのみが広河原に入ることが出来るようになった。そして、冬期の林道閉鎖中に歩いて通行することさえ規制し始めた。06年には奈良田のゲートが2.5mもの高さになり、池山吊り尾根ルートの核心はそれを乗り越える部分、夜叉神ゲートの入り口の仕切りも非常に狭くされ、大型ザックの場合、一度荷物を出さないと通行できなくなっているようだ。どうも、環境を名目に登山者さえシャットアウトし、バス会社やタクシー会社を潤わせるためだったようだ。

山を知らない小屋スタッフによる、不適切かつ汚らしいマーキング、ルート作り、ロープ張りが非常に多い。有名な所では、農鳥岳、間ノ岳周辺のペンキの印がある。へのへのもへじマークや、岩に書かれたゴミを捨てるな等の注意書き。静岡県は、注意書きなら問題ないとのことだ。しかし、べたべたペンキを塗ることは一種の汚染だ。そのようなルートばかりを辿っていると、少

しでもペンキの印が少なくなっただけでルートを失ってしまう危険がある。目印は最小限にすべきだろう。

南部の小屋も最近、山を知らず山を生活の場にするゆえのダイナミックな道作り、ものづくり(イスやテーブル作りやロープ張り)にがんばっている。国立公園内にもかかわらず、自然な既存ルートを開鎖して、小屋を経由するルートを開削したり、不適切なルートを切り開くことを県や環境省は問題ない行為としているが、個人がほんの少し石や植物を採取すればどういふ咎を受けよう。そのうち、ルートにはきれいな白線を引こう、環境に優しい透水性のアスファルト舗装にしようと言い出しかねない勢いだ。99年、大沢岳の巻き道が開削され既に塹壕化しつつある。本来の尾根を通るルートはしっかりしており、そのように掘れてしまう事はなかった。南アルプスは北アルプスのような岩(屑)山とは違い、泥山で崩れやすい地質だから、道は開削された端から崩れ始める。荒川前岳もあと1mで頂上が崩壊する。00年には、中盛丸山南の稜線ルートを大きく巻く道をハイマツを切り開いて作った。稜線は岩がしっかりしており、多少ハイマツの枝を払えば済む話だ。01年には、間違えも落ちる危険もない赤石山頂北側ルート両側に通るためのロープを張り、小屋を経由しなければ南下できないようお花畑に道を作り、本来の道の入り口にはロープを張った。百間平には01年8月、「静岡県南アルプスボランティアモデル事業」として、数十mの長さに渡り道の両側に白いロープが張られた。ロープは直径10cmの丸太に結びつけられ、片側41本、計82本ある。しばらくで杭の周りが浸食され、倒れるものが続出し、06年には倒れた杭の周辺に石を積んで直された。しかし、杭を打つことが自然破壊の一番の原因だったことは明らかだ。杭には、山岳会名と個人名を刻んだステンレスプレートが貼られ、それだけは今でも輝きを保っている。このような工事をするのがボランティアモデル事業とは、破局的財政状態の土建国家らしい。行政と組んだ者に不可能はないという事だろう。行政に尋ねると、登山者に評判がよい、あるいは既にそのルートがガイドブック等に記載されているからと言いつくす。評判が良ければよいのか、どのような調査で出された評価なのか、そしてガイドブックは現状を書いているだけでルートの妥当性を云々するものではない。好んで観光客を入れておいて、その人たちが道迷いするからと登山道を町の公園の遊歩道化、ペンキだらけにしてもよいものだろうか。つまり山小屋は、静岡県や環境省の意志を受け誠実に仕事をしているということだ。なお、03年には南信森林管理署が仙丈周辺に大々的に赤ペンキをつけ、数年前からロープと看板はいっそう多くなった。ロープの色は環境に配慮したグリーンだから許されるというものではない。それくらいしか仕事がないからといえど、いい加減にしていだきたい。なおその年、甲斐駒ヶ岳にも強烈な赤ペンキ印がつけられた。04年には、薬師と地蔵の鞍部から鳳凰小屋に下りる峠部分に、何十ヶ所もペンキが付けられた。05年にもまた仙丈周辺、砂払い岳直下が大々的に赤ペンキに彩られた。凄まじい塗り方は、常軌を

逸している。個人が行ったら確実に書類送検されるだろう。

05年から南部では、それまでのペンキベタ塗り、ロープ張りに加え、道の片側あるいは両側に石を並べて道を示す手法も使われ始めた。杭やロープやペンキよりはるかに環境に優しいと思う。しかし06年には、また赤石岳山頂部、茶臼岳山頂南のルートとしても不適切などころに赤ペンキがベタ塗りされた。これらの管理人は、その様なことがお好きらしい。茶臼峠の北の丘に05年から「ハイジの丘」と標識を建てるとは、乙女チックな女性だろうか。

04年9月には、茶臼岳以南の200mに渡り木道が作られた。登山道が掘れて荒れるのを防ぐために、滑りやすい木道を作った。この調子で整備するなら、これから数十kmも仕事がある。環境省は、防衛庁と共に財務省の植民地だ。官庁の中の官庁、財務省が将来の仕事を見つける嗅覚はさすが一流である。

登山道は人が通らない時は、野生動物の高速道路として利用されていることが、雪が降るとよく分かる。木道は人にとっても非常に滑りやすく、雨や雪では事故が結構ある。イスがフローリングの床を嫌うように、カモシカの蹄も木道を歩くのに向いているとは思えない。高架のようになった木道を横切るのも大変そうだ。まして、野ウサギ等の小さな動物にとっては大きな障害になるはずだ。ロープを張れば、カモシカは道を横切れない。あのような、人のためにも問題がある上、野生動物には大きな害になる構造物を作るとは、環境省の行う登山道整備事業の底の浅さは度し難い。

96年に南アルプス北部で高校総体の登山競技が行われた。そのために作られた広く整備された登山道は、数年後すっかり荒れ果て以前よりはるかに悪い道になってしまった。あまりに地形を無視して強引に作ったためだ。

本来高山帯に住んでないカラス、ネズミ、キツネ、テン、シカ、ニホンザルやチョウゲンボウが進出し、日本全体で3000羽いたライチョウが20年間で激減したという。白峰三山のライチョウも、100つがいと40つがいになったらしい。厳冬期3000mの稜線でカラスの飛翔を見、キツネの足跡を見るようにさえた。標高3000mを越えた地点で、ニホンザルの群れを見るのも普通だ。キツネの食べ残し、野ウサギの後ろ足の踵から下が登山道に落ちていることがあるし、フンはいくらでも見られる。小屋の前に出てきたキツネを見た超高齢登山者が、可愛いと歓声を上げ、エサを与えようとする情景に遭遇したこともある。彼らにとってキツネもライチョウも、同じ自然の動物という意味づけのようだ。また、最近は明らかにカモシカよりシカの方がはるかに多い。バイケイソウの群落までシカによりすっかり食べ尽くされているような食害も目に付く。北岳山荘、三伏峠小屋、中岳避難小屋、荒川小屋、百間洞山の家、聖平小屋等にはハシブ

トカラスの群が登山者を迎え、山奥へ来たという不安を消してくれる。それは、山小屋からの生ゴミや残飯に餌付けされた結果だろう。しばしば、そのまま埋められるだけのことが多いからだ。生ゴミを出さない、あるいは運び下ろしている光小屋と仙水小屋だけは、カラスを見ることがない。01年、荒川小屋をベースに静岡県のレッドデータブック作成の調査をしていた人に尋ねると、小屋の周りでハシブトカラスを見たことはなく、ホシガラスではないかとのこと。カラスが移動する夕方は小屋スタッフと宴会していたのだろう。それともほ乳類の専門家だったのだろうか。彼は近い将来絶滅が近いものにヒト(登山者)と書き、大增殖したものにヒト(ツアー団体)と書くだらうか。本来の登山者はレッドデータブックの最初に載る権利がありそうだ。

白鳥やガンを餌づけして、彼らが集まるのを自然と宣伝する行政やマスコミこそ、生息環境保全の貧しさを隠す自然破壊者であることは今や常識だろう。しばしば生存環境保護なしの保護が、自然破壊の免罪符とされる。

イヌワシはヨーロッパではほとんど絶滅している。まだ多少生息している日本でも、生息可能域の減少ばかりでなく生態系の頂点にいることによる化学物質の生体濃縮により、何十年もほとんど子育てに成功することはないらしい。イヌワシの寿命は長いので減少が目立たないから、個体数の減少が見られたらあっという間に絶滅するだろう。そしてどこかに作られた「イヌワシ保護センター」で絶滅の日を待つまで、自然保護の象徴となり人々を感動させるにあまりある威厳ある姿を保ち続けるに違いない。どう見てもイヌワシは絶滅した日本のトキ"Nipponia nippon"よりはるかに見栄えがよい。

北アルプスでしばしば問題になったクマも、小屋からの生ゴミに餌付けされた結果であるという。軽井沢のクマも同様だ。アメリカのトレールに出没するクマも餌づけ、生ゴミとそれらによる人馴れが原因という。それでも日本の現状はクマがほぼ全滅したヨーロッパよりまだましだ。本州にはツキノワグマ、北海道にはヒグマが生息している。九州が21世紀に入りやっとヨーロッパに追いついたくらいだ。04年の秋、各地でツキノワグマが大量に処分された。夏の大雨のためブナやナラの実が大凶作になり、麓の村や町まで出てきて人に傷害を与える事件が頻発したからだ。この年は例年の2倍、2500頭が捕殺された。翌05年度は平年並みになったが、06年度は推定生息頭数1万数千頭に対し4000頭もが捕殺された。これも、人に傷害を与える事故が多発したからだ。山村地域の人口が減り人と野生動物の緩衝帯が無くなったことや、ハンターの減少により野生動物が人を恐れなくなったこと等々、様々な原因が語られるが、多くの人の自然保護思想はこのように極めて対症療法的で底の浅いものだから、近い内ヨーロッパの先進国に追いつくに違いないとの確信を持つに至った。ハンティングで殺すのは駄目だが焼き肉大好き、しかし、いささかでも危害を加える野生動物の完全処分は致し方ないという、ナチスの優性思想並の単細胞環境浄化思想である。

イギリスでは百年以上前に絶滅したトビもまだ生息している。ヒトを恐れないライチョウは日本のものだけだ。その昔 6000 万頭もいたというアメリカバイソンを保護しても、野生ではもはや数万頭しか住むスペースがない。彼らの大地は全て牧場や農場になってしまっているのだから。現代文明は経済的利益をもたらさないものに、生存するスペースを与えるような余裕を持たない。ただ自然保護の成果として、自然破壊の免罪符として少数の生存が許されるだけだ。

藤原岳には、麓から山頂まで続く標高差 1000m の数十 km 彼方からも見える石灰岩採掘場がある。その横の登山道には「自然を守ろう」「登山道を踏み外さないようにしよう」等々、自然保護を訴える標識が林立し、「百日の説法屁一つ」「頭隠して尻隠さず」破廉恥以外の言葉なし。石灰岩採掘場の横の沢では、これまで一度も土石流が起こったことがないにもかかわらず、99 年、02 年と土石流が起こり、地域の集団移住さえ検討された。03 年 6 月のイラク支援法を成立させるための小泉首相の答弁風にいえば、土石流は、石灰岩採掘場の影響で起こったことは誰も否定できない、もしそうでなければセメント会社はそれを証明すればよいし、それをしないなら地域住民に保証すべきだということになる。この土石流の因果関係の仮説は、彼の屁理屈よりはるかに説得力がある。その昔、土地の古老が、自分が小さな頃から毎日毎日、石灰岩を掘っているのに山の姿は全く変わらない、本当に山は大きいといったのを聞いたことがある。しかし、数年前から様相が変わった。とうとう採掘場最上部が山頂直下の稜線まで届き、突然山形が変わって見えるようになったのだ。あの古老がご存命なら、きっと山は大きいと思っていたが、人間の営為はそれより大きいと嘆息したことだろう。全体が石灰岩でできたこの山に降った雨はすぐ地中にしみこむ。中部の秋吉台といわれるこの山の地底には、巨大な洞窟が張り巡らされているに違なく、採掘場の地肌剥き出しの断面からしみこんだ水が土石流の起こった沢に入り、有史以来初めての土石流を起こしたということは誰にも否定できない。

ところで、98 年から鈴鹿山脈名物のササが一斉に枯れ始めた。60 年に一度といわれる「ジネグ」あるいは「ジグネ」という現象のようだ。鈴鹿では、一般ルートでさえ背丈を超え足下が見えないくらい密生するササが生い茂っていることが珍しくない。だから、鈴鹿に慣れた登山者が他の山域のバリエーション豊かなルートに行っても、一般ルートにしかなじられないことが多かった。最近では、ササ原が草原化、灌木まで枯れ、見晴らしもすっかりよくなり、昔を知っている人は押し返すようなササの反発力を懐かしく思い出す。ササさえなければ、こんなに穏やかな山だったとは、気が抜けたようなものだ。第一次登山ブームの頃は藤原岳でもスキーがポピュラーに行われており、以後、積雪が減ってスキーができにくくなったといわれているが、今では少し雪が降ればすぐによいツアーコースが出現する。草原は夏のスキー場のようなものだから

だ。降雪が減ったのが原因というより、ササの繁茂がスキーに向かなくなかった理由と考えた方がよかったのかも知れない。60年に一度という長い周期のものは、人間の一生では捉えきれない。また、ナタで灌木の枝を払っても払っても、翌年はまたルートが分からなくなっていたところが、今では見晴らしがよく裸地化しているのは「ジネグ」ではなさそうだ。8合目のスギの植林地帯にも立ち枯れするものが出てきて、この大変化は酸性雨の影響もあるのかと考えさせられる。これは、このような事からも、単純に自分の体験、経験を一般化する事が間違いで、なかなか本当の原因は分かりにくいものだということが良く分かる。

06年2月、御池岳の山頂近くで雪を溶かして水を作ったら、油臭く、黒い澱がコップに残った。そして、あまりに不快な飲み心地なので、出来るだけ水を飲まず山行を続けたことがあった。南アルプスでは今だその様な経験はないから、中国からの汚染物質のためだろうか。中国から流れてきた気流は、直接鈴鹿北部にぶつかり雪となるからだ。

全体を見て自然環境を考えなければ見る見るうちにヒトは環境を消費し尽くし、残るはその墓標として「保護区」となり、白神の如く地元の人の立ち入りさえ許さない聖地となるに違いない。

現在でもゴミ処分場の不足は大きな問題になっている。しかし、作られてから100年後には、巨大なダムや砂防堤防が確実にその物理的寿命を閉じる。そして残されたその残骸とヘドロ化した堆砂は巨大な廃棄物になる。その時それらを捨てる場所はないだろうし処理するお金もないだろうから、日本中の渓谷は荒れ果てがれきの谷の廃墟になるかもしれない。

それ以上に問題なのは、新幹線と高速道路だ。それらは日本経済の大動脈であり、特に東海道新幹線、東名、名神高速道路はできてから半世紀近くになる。ということはコンクリートの耐用年数の半数以上過ぎ寿命が近づいているということだ。修理すればいいと思われるかも知れないが、架橋やトンネルだらけの道や線路は修理ができない。一つの橋を架け替えるだけでも、まず隣に臨時の橋を作り道路を迂回させてから最初の橋を壊した後、新築するという大変手間のかかるものだ。だから、架橋やトンネルの割合が多い道路や鉄道は事実上、新たに作り直す以外道がない。その頃、国には建設費用がなく、経済発展が見込めないところへは東海道新幹線や名神、東名のように世銀からの融資も受けられないだろう。小さい頃、昔の文明の跡にうち捨てられた建物や、作りかけの建物があるのを見て不思議に思ったが、日本の現状から考えると、維持することができなかつたから捨て去られた、ということがよく分かる。このままでは将来、新幹線と高速道には廃線、廃道になるものが続出するに違いない。しかし、コンクリートと鉄はぼろぼろに朽ち果て、万里の長城のような観光資源とはなりそうもない。ぶつ切れていつ完成するやも知れぬ金食い虫の第二東名や地方不採算高速道路建設の前に、スピアの東名や名神を作っておかなくては日本という国の存続は危うい。大動脈がなくなるのだから。

それ以上に大きな現下の問題は、水道管、下水道、ガス管、送電塔、一般道等の社会インフラの劣化だろう。日本はインフラを整備していた青年期を過ぎ、そろそろ体にガタが出始める中年期に入っているからだ。インフラがある程度整った時期からは、それらの維持管理に費用を回すよう制度を変えるべきものが、今だ新たなものを作ることに予算が組まれているのでインフラの劣化による事故が多発するようになっている。これまで一気に作ってきたから、同時多発インフラ劣化が出てきても当然だ。このインフラ劣化は、ますます大きな問題になる。昔、電柱や枕木がコンクリート製に変わる時は、しっかりした木として販売され様々利用されたが、現在使われているコンクリート製の電柱や枕木はリサイクルもできないのだ。

同様に登山装備、衣類には、山中いかなる故障が起きてもその場ですぐ修理できるコンパクトでシンプルな構成と、ものが必要だ。直せなければ、山行中止に追いやられることもある。重いスペアは最小限にしたい。十二分に目が届くコンパクトさと、簡単にメンテナンスできるシンプルな構成が持続型社会のベースであり、登山でも特に長期縦走を成就するために一番大切なポイントだ。

目先の利益、便利、安全のための近視眼的自然改変は取り返しのつかない事態をもたらしつつある。「循環型社会」を求めるといいながらダム、堰そして砂防堤防で水や砂をせき止め、海岸線が浸食されていると大騒ぎ、テラポットで海岸線を固めるとは「科学技術立国」が泣く、あまりに知恵がない。処理方法もなく何万年も隔離管理しなければならない放射能ほどではないが、どちらも未来のヒトに対する先手必勝の大いなる挑戦だろう。責任を問われる前に消え去るが勝ちだ。京都議定書批准のために、原子力発電の増大による温室効果ガス排出量減少効果が織り込み済みとは「前門の虎、後門の狼」と出口がない。温室効果ガスは、いつか冷えきり死の惑星になる地球を延命させる可能性を持つが、放射能にはそのような効用も思いつかない。一体、誰がどこで放射性廃棄物を何万年も安全に隔離保存するのだろうか。

99年から静岡県は各山頂に高さ150cm、30cm角柱の標識を設置した。環境庁の許可を受け美観も損なわないものとのことだ。聖岳山頂には朽ち果てた標識が乱立したままでも、あの小さな光岳の山頂に建てても問題ないというのが彼らの主張だ。メンテする予算は付かないので、すぐ壊れ、また新築するという無駄は日本の常識。光山頂は巨大標識で息苦しい。また、すぐ横には環境庁設置の2畳ほどの大きさの看板まである。官僚独裁の国では、美観や景観さえ行政は自由に改変できるようだ。これほど大きな、遠くの山からも見えるような巨大な標識を山頂に構築するのは、景観に対する挑戦、美観に反することは明らかだろう。なぜそんなに大きな標識が必要なのか。墓標とそっくりな形だが、彼らは本気で南アルプスの墓標を作ったのだろうか。それは数年後には割れ始め、惨めな姿になった。早くも04年、茶臼岳山頂の標

識は5年の寿命を閉じ、高さ80cm、30cm角の本格的墓石に変えられた。「茶臼岳」と墓銘が刻まれている。環境省、静岡県が作ったようだが、自分たちのしていることをよく理解している。06年3月、金沢市では景観に対する配慮のため、これまでの半分の大きさの道路標識にすることが認められた。厳しい規制のある道路標識でさえ行えるのだから、山の標識ももう少し慎ましやかなものにすべきだろう。整備の進む静岡県に対抗するかのよう、長野県も巨大標識を建立し始めた。

06年9月には、東海パルプがそれら巨大標識の横も含め、11ヶ所に大きな柱を立てた。高さ120cm、30cm角の柱の横には、「ようこそ東海パルプ社有林へ！ 上河内岳以北の大井川源流域は、東海パルプ(株)の社有林です。東海パルプでは、社有林の豊かな自然を守るため、厳密な基準を設け森林管理を行っています。入山者の皆様も、ご協力お願いします。東海パルプ株式会社」「あなたと守りたい自然があります」と大きく書かれている。もっともだが、その横にある大きな標識にパネルでも張れば、標柱が乱立する見苦しさはなかったはず。そして、大きな柱にしなくても、もっとコンパクトに表示する方法はいくらでもある。その大きさだけで、環境に対する配慮が乏しいと思う。また、「豊かな自然」は、第一に山小屋から排出される生ゴミ、それに引き寄せられたカラスやキツネなどにより破壊されると言うくらいの想像力を持って、道徳を説くのと同時に、森林限界以上の山小屋の撤去、最初は避難小屋での食品等販売を止め本来の避難小屋に戻すくらいのことを考えて欲しい。よくよく読むと、昔からあったパネルの「樹林を愛護し、緑の国土をつくりましょう。東海パルプ社有林 林内でのたき火やたばこの火にはじゅうぶん気をつけましょう」より、ずっと強く所有権を主張している。06年シーズンからは、東海パルプ所有地に立つ山小屋、例えば聖平小屋には「東海パルプ社有林借地票」が入りに張られるようになった。「当社所有林を借地する者は、この借地票を借地範囲内の見やすい場所に掲示すること。借地票の大きさは、日本工業規格A3以上とする」と書かれている。今のご時世それも当然だろうが、同様に子会社の東海フォレストが委託管理しているだけの公営山小屋を、自社で作ったかのように思わせる営業振りも改善して頂きたい。領収書にももっとはっきり県営あるいは市営と明記すべきであるし、小屋にも公営である旨もっと大書きしなければ、自己所有権の主張と矛盾するいささか身勝手な主張と言われても仕方ない。

奥大井・南アルプスマウンテンパーク推進協議会という、87年制定されたりゾート法の亡霊が復活したような団体がある。多くのリゾート施設が破綻して惨憺たる状況なのに、今度はエコをテーマに再挑戦するつもりようだ。環境省、国土交通省、林野庁、静岡県各市町村、東海フォレスト始め地域の企業が、南アルプスを公園化するため山小屋、登山道、交通アクセスを整備するという。静岡飛行場は、一県一飛行場はとうに破綻して赤字が確実なのにもかかわ

らず建設が進められているのと同様、それを利用するための条件整備、つまり自由に休暇を取れる権利等の確立なくして、箱もの建設は高コストとさらなる利用率の低下を残すだけだろう。

開催期間終了後、作った施設全てを撤去することは無駄ではないという環境博、愛知万博もすごい事業だった。利益は出たというが、周辺インフラ整備のため愛知県の県債残高は99年から05年にかけ1兆円増えている。中部空港と、万博会場及びアクセス道路に多額の投資をしたためだ。着工が凍結されていた第二東名も、その部分だけ片側3車線140km走行を前提に作られるはずのものが、片側2車線に縮小して作られた。全く将来の3車線化は考えられていない。04年12月に完成したハイウエーの道の駅、刈谷ハイウエーオアシスの駐車場は、深夜から早朝にかけ、エンジンをかけ仮眠している大型車で一杯になる。カンバン方式のため、下請け企業はトヨタにジャストインタイムで部品を届けなければならない。しかし、15分前にならないと、工場に入れてくれないので、周辺道路は駐車する大型車であふれかえり問題になっている。この巨大駐車場により、その点は多少改善されたのかも知れない。全国交通死者ワースト1は愛知県、その中でもトヨタのある西三河地区は特に多い。なお、ハイウエーオアシスの1億2千万円かけて作られたトイレは、応接間そのままの広さと贅沢な作りで、恐れ多くも恥ずかしくも、出るものがなくなってしまうほどだ。山と同様、公共事業がトイレ整備にシフトしていることが伺われる。環境博はこれらの事業も含めて環境的だったのだろうか。

自然公園法は「…利用の推進を図り、もって国民の保健、休養及び教化に資することを目的とする」。つまり、まず観光客を誘致するために環境を利用することを目的とし、「…関係者の所有権…財産権を尊重する」とあるように環境保護、保全は二の次になっている。01年10月には40年後に林道を2倍にすると発表して気を吐いた林野庁だが、環境問題でさんざん叩かれ往年の勢いはない。それに代わり環境省が自然公園等整備事業として、「自然にやさしい」「自然とのふれあい」「自然との共生」という名目で国立公園内でも大々的に道路や施設等の整備、つまり都市公園化のための公共事業を押し進めている。その中の一つである緑のダイヤモンド計画では、室堂平の登山道を延々と1.7m幅のコンクリートで固めた遊歩道としたことは有名だ。高名な山岳ジャーナリストでさえ、それを評価しているのだから勘違いも甚だしい。まだまだ日本百名山登山歩道整備事業始め目白押しだ。彼らは確かに「自然公園法」の趣旨に則り誠実に職務を遂行しているのだろうが、時代錯誤である。昔は林野庁と「リゾート法」、今は環境省と「自然公園等整備事業」が自然破壊の癌だ。自然を守るべき役割の行政機関が率先してそのようなことをするのだからいっそう悲劇的だ。この調子では、自然林の管轄を林野庁から環境省に移管させても、伐採の代わりに整備事業に利用されるだけだ。

林野庁は98年、国有林野事業の根本的改革を行ったが、これまでの借金1兆円を返却するために、下北半島のヒバの天然林、秋田の天然林、木曾ヒノキを刈り続けている。かなわぬ

借金返済のため、全ての国民のものであるはずの森林が消え去ろうとしている。全国の森林整備法人の借金も1兆円以上あるという。南アルプスの奥深くまで延びた林道の多くは、崩れかけ、遠くから見ると山肌に延々と伸び山を崩す切取線のような。あの崩れた林道をどう直し、山の崩れをいかに止めようとするのか、悲観的になる。07年4月、農水省所管の独立行政法人、緑資源機構(旧森林開発公団)の官製談合事件で、関連6法人の役員の3割が林野庁と緑資源機構の天下りと判明した。これまで作られた林道には、手入れもされず半ば壊れつつあるものが多いのに、まだ新たな林道を作るつもりらしい。06年7月の暴雨で大沢岳からしらびそ峠への林道橋梁もまだ落ちたままだ。林道があるからと登山道が失われ、林道が壊れた頃は登山道が廃道化している。大沢渡ルートは事実上廃道、負の連鎖は止まらない。

それにつけても、うっとうしい樹林帯を抜け、大伐採地に入ると何と爽やかな空の青と展望か。そんな経験をしたことがある。しかし、そういう感覚が、強引な事業を推し進めさせた気持ちの根本にあるのかも知れない。より良き生活のため、近視眼的であろうと、自然に手を加え「KAIZEN」したいという疼きがこれまでの文明を作り出し、そのつけを払わなければならない時になっている。

04年には環境省所管、いわゆる天下り先の国立公園協会が、同省からの仕事を無断で、さらに天下り先の「自然環境共生技術フォーラム」に、孫請けさせていたことが発覚した。「自然環境共生技術フォーラム」は社団法人「自然環境共生技術協会」となり、04年には「自然再生事業基本調査」が随意契約で委託された。05年も同様だ。どこもかしこも仲間内で仕事を回しているだけだから、GDPは増えても本当の生活水準は上がらない。新たな公共事業の種は「自然再生」である。これなら、トイレと異なり終わりが無い。

70年に成立した10年間の時限立法「過疎法」は00年3度目の延長が決まった。これまで財源不足であれば返さなくてもよい過疎債と、補助金でどれ程の無駄な施設建設が行われたのだろう。そして、補助金の出が渋くなったら、環境を錦の旗にして「自然公園等整備事業」とは、ネズミ講の泥沼化している。両神山の例の如く、行政(この場合は環境省と埼玉県)は何と大胆に登山道を開削することか。そして個人の方が自然保護に熱心に見える(秋山基、「両神山でなにが起こっているのか」、「山と渓谷」、00年8月号、177～180頁)のは、南アルプスの例と同様だ。

日本の中では大きな南アルプスでさえ、これほど情報、装備、食料が良くなつてはあまりにも小さい。しかし、行政、土建業者、観光業者一体化して遊園地化させても、北アルプスのようにスペクタクルな雪や岩の展望はなく、魅力に欠ける二流の山になるだけだ。広河原と上高地を

比べても明らかだろう。すっきりした展望と広がりのない広河原から見えるのは、ほとんど緑の山肌と大樺沢に連なる砂防堤防の列だけで、上高地のような別天地の光景とは比較にならない。

人口 600 人の芦安村(現、南アルプス市芦安)に大きな公営の温泉(塩素入り、循環風呂)が 4 つあった。最近、山奥の砂防堤防が全面間伐材でウッディーに化粧されていたり、総天然石張り風のものもある。これらは肥大した公共事業費の使い道に困った末の現象だろう。そんな小さな村が議員定数 10 人、村一番の産業は村役場、南アルプス林道汚職事件で後に有罪が確定した村会議長でさえ、実際は竜王町に住んでいたというまか不思議。村営の山小屋や 03 年、3 億 1200 万円かけて新設された芦安山岳館の管理人さえ櫛形町の人だった。彼の高級車好きの息子が、後釜として広河原山荘の管理人になっている。この村にはこんな例がいくらでもあったという。村でどんなに公共事業を行っても、村人が潤うのではなく外部の人が潤うという構造は、日本のどこでも見られることだ。彼らは「村民クラツラ」と呼ぶべき、特権階級だったのかも知れない。

南アルプスの山小屋は殆ど行政が建てたものだ。その、減価償却やメンテの費用を考えなくても、利益は殆ど出ていないようだ。これ程の施設を作っても、建設に関わった人が利益を得るだけで、収入は山小屋スタッフの給料に消えてしまうという。このような不採算の施設を巨費を投じてなぜ行政は作るのだろうか。自前の予算も多少必要なのに、議員に土建業者が多いといえ恐ろしい無駄をしているとしか考えられない。食事を出さない、シンプルな本来の山小屋を建て維持するだけなら、結局はるかに利益率が高いものになるのではないだろうか。エコではなからうか。山が面白くなるのではなからうか。

03 年 4 月 1 日、八田、白根、芦安、若草、櫛形、甲西が合併し南アルプス市になった。合併後 2 年間は議員の身分はそのまま、かつ給与は最高の所に合わせ特権的年金も得られ、合併特例債を今後 10 年間発行でき、その 7 割を国が負担してくれるという。7 万人の市に議員が 95 人になった。300 万都市、横浜以上だ。議員定数は 30 人であるから、議員は 3 倍に膨れあがったことになる。これでは民意に関係なく合併が進むはずだと考えたいところだが、その内の 1 人だけが異議申し立てして議員を辞職しただけで、他は平然と議員を続けたのだから市民は嘗められたものだ。これまでの債務の償還は軽減されないが、10 年間は新たな起債で息がつけ土建業は安泰だ。しかし、10 年過ぎて降りかかる償還で地方行政の息の根は止められるに違いない。補助金行政延命の最終兵器だろう。アポトーシスとして硬直した官僚機構が国民から切り離されれば目出度いが、道連れになるのはかなわない。都道府県知事は自治官僚始め中央官僚が幅を利かせ、土建部長等の実権を持つ幹部には中央土木建

設官僚等の出向者や天下りがいかに多いか。都道府県、市町村議員に土建業者を兼業している人が多いことは、隅々まで土建国家であることの証左である。小さな国土をこねくり回すのはとくに限界なのだから、土建立国として世界に雄飛すべきだろう。

ところで、「南アルプスの村、長谷村役場」の長谷村はどうするのだろう。「元祖南アルプス市」あるいは「本家南アルプス市」それとも「西南アルプス市」か「中央南 W アルプス市」とでもするのだろうかと心配していたら、06年3月31日に、伊那市、高遠町と合併し、新「伊那市」になった。しかし、南アルプスのような固有名詞を、それを独占的に占有してない所が使うのは解せない。アルプスという外来語を使わなくても、赤石山脈という言葉がある。この調子で行けば諏訪市周辺はスイス市、安城市周辺はデンマーク市、茅野市辺りはピーナス市とでもなるのだろうか。長野県駒ヶ根市、飯島町、中川村はいったん「中央アルプス市」と決めたが、05年2月の住民投票で白紙に戻された。これからも、松本市を「北アルプス市」とするような愚行が繰り返されないことを祈るだけだ。元号等、日本のというものに格別なこだわりを持つ自民党からも、このような国辱の名称に対する批判がないとは、本当に日本語を、日本の文化を、日本を愛しているのかはなはだ怪しい。

もはや現在では行政のお金と、その威をかる観光資本による登山の過剰な大衆化は、自らも滅ぼすものとなっている。全く現在の南アルプス南部の状況は時代に逆行するもので、早く既得権を得たいという観光資本の最後のあがきかのように凄まじい。公の施設、山小屋を無料で民間に丸投げする様は、巨額赤字を持つ道路公団がファミリー企業を大もうけさせていた関係そのままだ。平等にどこまでも誰でも登れるようにするのが民主主義というなら、富士山の頂上まで車で上れるようにすればよいし、誰でも登れるようにとエベレストの頂上まで手すりや階段を設けてもよいだろう。ヨーロッパのように地形的にハイカー、観光客と登山者の領域がはっきり別れない日本では、多少の制限、つまり自分で歩いて登り自分の食料は自分で持つくらいの制約を設けなければ全て観光地になるだけだろう。現在の山岳環境を、自分たちの世代で全て消費し尽くしてもよいなら別だが、未来のヒトの取り分も残しておくというのが良識というものだ。これは差別撤廃とは相反しない問題だ。

99年12月、国有林内の山小屋に対する売上税方式導入に対し、原告の全面敗訴が言い渡された。03年3月の高裁の判断も同じだ。それは林野庁が国有林をどのように運営してもかまわないという、おすみつけを与えた不当な判決に違いない。しかし国有林内で地の利を得、競争もなく独占的に営業し繁盛している多くの巨大小屋を見れば、そう判断されても仕

方がない。縦走路で一番ルート間違いをすることは、道をふさぎ迷路のように立て込んだ巨大な小屋だ。かの小屋の自炊者やテント泊まり者は、冷遇されていると聞く。自ら小屋の規模を縮小等、つまりお土産まで売る観光地の宿ではなく本来の山小屋に戻すような犠牲を払わない限り、残念ながら林野庁の判断は正しいと思う。本来、山登りの楽しみにあのような巨大な小屋は似つかわしくない。山小屋撤去により、登山文化が破壊され遭難が増えるという森村誠一（『信濃毎日新聞』、03年3月27日）は、登山と観光の違いも分からない。04年1月には、八ヶ岳の赤岳鉱泉にアイスクライミング用人工氷壁が完成した。自然の岩場の横に人工壁を作るような陳腐さであり、アミューズメント化極まれの感がある。もはや山小屋ではない。そのようなものは、町の大きな冷凍庫内に作るべきだろう。高級外車が好きだというオーナーの勘違いも甚だしい。06年2月、かのオーナーから山小屋に勤めないかとの勧誘を受けた人がいる。10年くらい勤めたスタッフは皆一軒家を建てている、という美味しい話に大変悩んだそうだ。冬は海外にでも行ってゆっくりすればよいらしい。

南アルプスの小屋は、北アルプスのように良きにつけ悪きにつけビジネスライクのものではなく、それぞれの小屋主の考え方により登山者への対応、食事には大きな差がある。暴君か野生児のような小屋主もいて驚かされることもある。そのような小屋にある雑誌記者が取材で訪れたのに出くわしたことがあった。もちろん一般の登山者に対するのとは違って変わってにこやかで温かいもてなしをしている。看板を背負った人の取材による記事は当てにならないわけだ。それで筆を曲げる人はジャーナリストとは呼べない。評価を目的にしたものでなければそれでよいのかもしれないが、『ミシュラン』のように匿名による取材にする必要がある。04年には、その調査と評価は結構人間的であると元調査員の書いた内幕ものが出版されたが、真っ当に評価しようとする努力は見上げたものだ。「行動規範として定めていたのは、、、客へのサービスだった。」（パスカル・レミ、『裏ミシュラン』、吉田良子訳、パブリコ株式会社、04年、188頁）というように、ジャーナリズムの本質を忘れない批判精神は、少なくとも日本の山岳ジャーナリズムに欠けている視点である。現状はよく言ってTVの宿紹介番組のノリである。行政、山小屋、メーカー、小売店の山岳共同体を批判的に分析、報道するところにその存在価値がある山岳雑誌ジャーナリズムがその有様というのも、日本的あるいは東アジア的な、身内を大切にす家族主義的封建主義の暖かさ故だろう。しばしば大所高所から環境破壊を論ずる記事を掲載するのは、無意識の贖罪に違いない。しかし、そのような「書生論」では現実是不変である。山小屋の存在自身とそのサービスを問い直す、あるいは業者の頸木を断ち商品をきちんと評価するという痛みを伴うところからの発言、「隗より始めよ」でなければ単なる言い訳に過ぎない。

たとえ毎年、シーズンオフに関係業者とのんびり旅行に行くような親しい間柄であろうと、お

互い齒に衣着せない自由闊達な議論、相互批判が出来てこそ真の友人であり、仲間ではないのだろうか。

歌唱指導して歌うことを強要したり、ケーナやハーモニカの独演会に強制参加させる山小屋は、朝叩き起こしてラジオ体操を強制する宿と同じだ。独占的営業しているから、そのような小屋番の牢名主化が起こる。山小屋は宿泊を拒否することができない公的な施設であり、このような私物化は許されないと思うが、幼稚園児のように扱われることに快感を感じるマゾヒスト登山者が多すぎる。雑誌も小屋番による強制マスゲームを評価することはあっても、小屋番の専制君主化に対する疑問は掲載することがない。小屋番の言動は、いつも哲学者のように扱われ、そのポートレートは芸術家の如く気取ったものが掲載されることが多い。少なくとも、旅館やホテルのオーナー並に暖かいおもてなしを感じさせるように扱うべきものを、神秘化する。山小屋を利用するのは、仲良しクラブ員ばかりではない。その様なことはプライベートな山小屋ですればいい。ジャーナリストは取材対象に餌付けされ、批判能力を失っているようだが、その程度の接待で魂を売ってしまうほど、彼らの生活は困窮しているのだろうか。しかし、雑誌を売って給料を上げるにはヨイショ記事だけではなく、インターネット上に見られるもの以上に真っ当な論評と情報が必要だ。

同じ南アルプスでも、全てにわたり行き届きアットホームで居心地のよさそうな小屋でもその宿泊料は他と変わらず(安い)、ものすごいところでも地の利を得て千客万来のところもあるのだから、如何ともしがたい。

余談と脱線

『はじめに』にも書いたように、長期縦走は一つのライフスタイルであり、一種の生き方、考え方、大げさに言えば哲学故、必然的に社会問題にも過敏にならざるを得ない。商業出版されない極私的労作は、社会的要請からも、評価からも自由だから自己満足の世界に墮ちて沈滞しなければやっていられない一面がある。そして、やり場のない少しの憤りと無力感が、テーマと関係のない社会批判に向かって憂さを晴らしがちだ。この項は、その肥大したストレス発散の嫌いがある。それは本音の吐露であるから、より体感的な物事の捉え方を赤裸々に表しているのだろうか、いささか乱暴で粗雑な評論に興味のない方は、この項を無視して下さるようお願いする。私家版故の余談と脱線と、笑って無視されるようお願いする。

南アルプス南部は、90年前後から大きく観光化への道を歩み出し、さらに07年1月には南アルプスを世界遺産に登録しようとする構想が発表された。何度も書いているように、南アルプス程度の大きさの山域では少なくとも森林限界以上に立つ山小屋の撤去をしない限り、本来の登山の対象にもならないようなスケールであり、登山の楽しみは失われたも同然だ。山小屋だらけの山は、前世紀土建国家の人工遺物であっても、自然遺産と呼べる代物ではない。どこまでも観光のため、いや土工工事のため日本の小さな自然を壊し、さらに狭苦しく、息苦しく、消費し尽くすつもりなのか。

世界史的にも、89年6月4日の天安門事件、同11月9日のベルリンの壁崩壊、91年12月25日のソ連崩壊、93年11月1日マーストリヒト条約によるヨーロッパ連合EUの発足と大きな変革期に当たっている。

日本では、土建国家のついでに財政が破綻状態になり、「憎悪の時間」で何かにその鬱積した気持ちを爆発させないと社会が維持できないような臨界的状況を呈している。

オーウェルの近未来小説『1984年』のテレスコープ的監視社会がすでに現実になっている。Nシステム、顔認識技術、携帯電話、そして批判勢力であるべきジャーナリズムは記者クラブ的広報体質で大政翼賛の一翼を担い、99年には「盗聴法」、「国旗国歌法」、「改正住民基本台帳法」と、どこにも逃げ場がない胸苦しさがあふれる。世界で唯一(日本が植民地にしていた、韓国と台湾を含め)、極度に個人の身分関係情報を集積した1872年の壬申戸籍に始まる「戸籍」がデジタル化、数値化されれば、管理システムが完成して憲法はその前で立ちすくみそうだ。アナログの戸籍という完全人別帳でさえ、何人もその網から逃れられず、門地、出生による差別から自由になれなかった。

自治会とは名ばかり、行政の下請けの町内会は五人組の感性のまま。各種募金は町内会を通して準強制的に徴収され、募金を行う特殊法人は官僚の天下り先。今でも、神社、寺院には寄付金の大きさ順に金額と氏名の書かれた札が立てられている。これでは、どちらも拝金教という他ない。これらに比べ、極論すればお金で買えないものはないといったホリエモンの、真っ当で何て品のいいことが。誰が地域の名士で、どのような序列があるのかが一目瞭然だ。そのリストに載らない者は、地域の協調性を乱す者として村八分して治安を守るのが、土着民主主義の公権力行使だろう。しかし、そのような宗教は世界中のどこにもなく、世界の常識、通念上それは宗教とはいえないが、それが「天皇を中心としている神の国」(森喜朗首相の発言、00年5月15日)の世界に冠たる文化だろうか。戸籍制度が出来る前、権力の人間管理の役割を担った檀家制度に安住していた仏教は、一部、観光として余命を保っているが、宗教として

は全く力を失って当然だろう。葬式仏教もそろそろ限界だ。死んだら誰でも仏になれるなら、01年6月8日に起こり04年9月14日に死刑執行された大阪教育大学付属池田小学校児童殺傷事件の犯人も同様だろう。片や神道は、国家神道として明治以降、天皇制の精神的バックボーンとなり日本を存亡の危機まで導いた。その天皇のために戦って死んだ軍人と軍属だけを祀る、明治天皇によって1869年に作られた靖国神社は、現在は宗教法人として存在し、首相始め多くの国会議員が参拝しているのでは、日本が過去の戦争を美化していると思われても致し方ない。戦前、靖国神社は陸軍省、海軍省管轄の宗教的軍事施設として侵略戦争遂行のための精神的支柱だったのだ。「死者に対してそれほど選別しなければならないのか」とA級戦犯合祀を正当だと小泉首相は主張したが、少なくとも靖国神社は戦没者全員を祀っていない。被差別部落の人も排除されている。靖国こそ死者を選別している。それにつけても、厚生省引揚援護局の名簿だけで神に祭り上げるとは、余りに安易すぎる国家神道だ。厚生省の行為は、明らかに政教分離の原則に反する。戦争でなくなった人を等しく祀るならともかく、行政によって書類選考された人だけを祀り、祀って欲しくない人まで勝手に神にしてしまう。「このような宗教は、明らかに、文化程度の極めて低い無知な民族に認められるものである」(ニコライ、『ニコライの見た幕末日本』、中村健之介訳、講談社学術文庫、79年、37頁)。イスラム原理主義のように唯我独尊、排他的、寛容のかげりもない。05年5月16日にも小泉首相は、「罪を憎みて、人を憎まず」という孔子の言葉を引用して、05年の靖国神社参拝を表明した。誰に対しても適用して欲しいものだ。カトリック教会でさえ、84年に日本において祖先崇拝を容認すると文書を発表している。過去を直視して反省も出来ない人はカワードか、自我が確立してないかのどちらかだ。

日本にシュタージのような秘密警察は不要だ。アンネはどここの屋根裏に潜めばよいのやら。アンネを追いつめたナチスは、日本において全く「世間」そのものだから。ナチスドイツでは、国内でもレジスタンスが行われ、ヒトラー暗殺未遂事件が何度もあった。日本は、敗戦の日、監獄に囚われていた羽仁五郎はすぐ多くの人々が来て解放してくれ、その日が唯一日本が共和制を宣言できる可能性があったと無念さを書いている(羽仁五郎、『自伝的戦後史』、講談社、76年、107頁)。結局、政治犯3000人は治安維持法廃止の10月10日まで収監され続け、三木清はその間に獄死した。「戸籍」や「町内会」を通して全ての反対派は圧殺され、世界史上類がない自殺的戦争へと突き進んだこの国では、教育委員会、公安委員会、農業委員会、各種審議会等々、全てが行政から独立せず、よくて下請けか露払い、あるいは名誉職か出世コースの一つに過ぎないから権力が暴走する。国民は寄らば大樹の陰で『ぼくたちの好きな戦争』(小林信彦著、新潮社、86年)と、勢いのいい時は大はしゃぎ、負ければ、そうしなければ家

族が困った、仕方なかった、泣く泣く嫌々従っていただけなのはあなたも知っているのではないかと、しぶとくたくましい阿Qである。タカ派政治家は、引退すると良識派に変貌するのが常だ。「戦争責任者の問題」(伊丹万作、『映画春秋』、46年8月号、佐高信、魚住昭『だまされることとの責任』、高文研、04年)は封印され続け、「一億総懺悔」、全てを水に流してお終い。

近い将来、全ての人に身分関係、病歴、健康保険証、運転免許証、クレジットカード等々入った住民基本台帳ネットワークの個人用通信機能付きICチップ(現在の初期モデルでも32KB、全角16000字分の容量を持つ。そこには氏名、生年月日、性別、住所と住民票コード、カードのパスワードが入っているだけだから、空も同然。このシステムを維持するために中央政府だけで年間何百億円もかかるから減多に必要な住民票が、現在でも郵送で取り寄せられるにもかかわらず、どの自治体でも取り寄せることができるようになるという利便性だけのために、このシステムが作られたのではないことは明らかだろう)を耳にでも埋め込むことになる。なりすまし防止のために、生まれたら直ちに虹彩のパターン、指紋、血液型と戸籍情報を書き込んだ通信機能付きICチップを耳たぶと、確実性のためもう一ヶ所鼻腔の奥にでも埋め込む事が理想だ。現状では、どんなに精緻な戸籍と住民基本台帳ネットワークを使ってもなりすましを防止することはできない。必要な機能はどんどん付け加えればよい。運転免許を忘れることも、クレジットカードやキャッシュカードを紛失して大騒ぎすることもない。全ての決済をそれですますことができれば、お金も持つ必要がない。Nシステムは導入時、肖像権、プライバシーの侵害が問題になったが、そのデータはすぐ破棄されるとのこととど、うやむやになり増えていった。そして、事ある度にデータは消去されていないことが明らかになっている。国会議員と県会議員の動きは全て掌握されている(大河原宗平、仙波敏郎、「対談 公安に監視される警察官たち」、『週刊金曜日』、05年7月1日号、10頁)。田中康夫のように下までオープンで、腹の据わっている人以外は何らかの弱みを握られているわけだ。いくら精緻な監視システムを作っても、全てをチェックすることは物理的に不可能だが、特定の人の行動を探るために利用すれば現在でも、携帯電話をオフにしていようと、その動きが正確に分かる。

警察は、国連規約人権委員会から98年に出された勧告とおり、自白の強要、冤罪の温床である代用監獄を廃止すべきだろう。しかし、代用監獄に法的根拠を与える「刑事施設・受刑者処遇法改正案」が06年6月2日可決成立した。自らの正当性を示すため取り調べは全てビデオに録画すべきではないのか。パトカーや白バイでの追跡、公務執行妨害で逮捕する場合も、録画しておけば自らの正当性を証明することが出来る。06年5月9日、最高検察庁は、取り調べを一部、録画、録音すると発表した。翌々日、警察庁の漆間長官は、警察は検察に追随しないと述べた。07年2月23日、鹿児島地裁により鹿児島選挙買収事件にお

ける被告全員の無罪判決が確定したにもかかわらず、警察のでっち上げの責任は問われる気配もない。勧告には多くの指摘があるが、今だ殆ど改善されていない。何百億円とかかるNシステムと比べビデオ等、はした金で導入でき、警察の権威、名誉を高めることになる。権力は、勝手な時だけ国際的要請あるいは約束として外圧を使うが、自らの力の源泉、権力の恣意的運用にかかわることには全く手を付けない。日本政府は、国連を軍事行動拡大への理由付けにこそすれ、軍縮、人権、環境問題ではことごとく反対している。。恣意的に国連の権威を利用して、軍拡したいという思惑が見え見えだ。

各所に配置された監視カメラと顔認識技術によって誰がどこで何をしているか、どの道を通ったか、また携帯電話とGPSの位置情報で正確な所在地が確認できるので犯罪は激減するだろう。現実には、愛媛県警が容疑者の車にGPSを取り付けていたことが分かった(『朝日新聞』、06年4月11日)。たとえ犯罪が起きても直ちに解決するという清潔な社会が構築される。商店、駅等全ての入り口に、通信機能付き住基ICチップなくして入れなくなるようにすれば、コンビニや本屋の万引き、キセル乗車さえ不可能になるだろう。善良な人にとって、常に自分がどこで何をしているか見守られていれば安心極まりない。女性の夜の一人歩き、子供を持つ親も安心だろう。スピード違反をしたり、変な店に入ったり、浮気をしたり、学校をさぼったり、出張に行ったついでに山に登ってきたり、外勤に出てパチンコをしたり喫茶店で油を売ったり等々といった感心できないことをしない普通の人には利便性だけが際立つシステムだ。行政府がそれらの個人データを流出させたり、利用範囲を拡大して恣意的に使ったり、悪用するようなことはあり得ないと政府首脳は答弁で保証している。公務員には守秘義務があり、安心できる制度だという。既に、02年5月の日韓ワールドカップの折、フーリガン対策として空港に顔認証監視カメラが設置されており、それが現在どのように拡大され、運用されているか明らかにされていない(櫻田秀樹、「ICパスポートの気になる中身」、『週刊金曜日』、05年11月11日号、8～11頁)。全て秘密裏に着々と事が進められている。

国旗国歌法成立当時、政府首脳は教育現場で日の丸掲揚を強制しないと明言したのに日の丸の掲揚に反対した教職員が処分され続ける。04年10月28日の園遊会で、有名棋士が東京都の教育委員になっているのを知り驚いたが、明仁天皇に「日本中の学校で国旗を掲げて、国歌を斉唱させるのが私の仕事」というと、「強制になるということでないことが望ましい」と返された。さすが、即位の折、憲法を守ると明言した天皇である。その後も、天皇の意向さえ無視して国旗国歌は強制され、教職員は処分され続けている。国旗や国家を大切にしようと言う人は、天皇の意向に敬意を払わないようだ。05年10月6日、結婚のため皇族を離れる天皇の第三子に対し、皇室経済会議において「品位を保つため」一時金、1億5000万円の支

出が決定された。まるで、品位はお金で買える、あるいはお金がなければ品位は保てないかのような言動だ。これまでの生活水準を維持するためとも言わなければ、余りに礼を失している。しかし、なぜ都の教育委員が日本全体のことを仕事と考えたか、一番問題なのは、なぜそんなことが教育委員の最大の仕事かということだ。教育委員会の大きな目的は児童や生徒の学力向上ではなく、儀礼的愛国主義を涵養することらしい。表面的に形式を整えればよしとし、内容、心を伴わない小賢しい人間を育てることが教育の目的とは思えない。学力低下は、文部科学省、教育委員会の方針の当然の帰結だろう。国旗や国歌にも失礼だ。どんなに着崩した制服姿でさえ、一応制服を着ているからと許容する学校と同じく、あまりに形式的だ。学校ではお粗末な形式を整える以外、教えることがないからまともな学力もない生徒が無事卒業できる。どこもかしこも、目的をはっきり持たないから形式に走る。制服を着崩した様は、セクシーなコスチュームより人を妖しげにさえ見せる。特攻崩れや、制服を着崩した警官のように心が病んでいるのかも知れない。何のための学校か、何のための制服か、帝国陸軍御用達、員数合わせ的事なかれ主義でエネルギーを浪費している。

警察の腐敗は次々明らかになり、自浄作用の高さを示し続ける。松本サリン事件の河野義行は警察の事実を歪めたリーク情報によって、犯人にされかかったが、結局、警察は彼に "apologize" ではなく "regret" と表明した事からもその良識と健全性は明らかだ。裁判官が 100 人以上法務省に出向して、司法、行政は一体化して国の利益を守ろうとする。検察官が裁判官に捜査情報を漏らし、証拠を隠滅するという行き過ぎが起こるくらい裁判官と検察官が一体化して日本の秩序を守ることに腐心。検事総長は法務事務次官よりはるかに格上という、ねじれもある。法務省主要幹部ポストは全て検事であるから、結局、法曹三者は検察官・裁判官と弁護士・法曹二者になっている。これでは司法に中立性を求めるのは、森に魚を求める愚だろう。政治家は、気のせいとか検察不祥事、汚職が起きると決まってその秘書が摘発され、次々浄化される。しかし、借金が巨大すぎ他への影響が大きいといってつぶされなかったダイエーのように、収賄金額が十分大きい議員の責任は不問にされる。絶え間ない官僚不祥事において、キャリアは外郭団体等へ転出させられ、ノンキャリアは塙のなかに隔離されるほど官僚組織は自浄能力を持っている。例外は、警察と検察くらいだ。組織的な公金不正使用という違法行為が次々明らかになっても彼らは全く認めない。

20 年前にも、退職したキャリア警察官僚が組織的な裏金作りを告白した本を出版(松橋忠光、『わが罪はつねにわが前にあり』、オリジン出版センター、84 年)しており、それ以後も頻発する事件に 04 年 2 月には北海道警の元警視長が実名で裏金作りを証言している。これら裏金は、捜査費等から幹部の餞別等私的に流用されたものだ。こういう明らかな「詐欺」でも

「不正経理」と報道される。情報公開を求めると、多くの警察署で会計文書が間違っただけで破棄されているのが分かるのはいつものことだ。全国の津々浦々で次々不正が発覚したが、大手新聞社は散発的に報道しただけだった。とうとう、北海道新聞が06年1月14日お詫び記事を掲載して、北海道警察本部の裏金疑惑はうやむやのまま終わってしまった。秘書給与を流用したとして辞職から一年以上たった03年8月詐欺罪で起訴され、04年2月有罪判決を受けた辻本清美元衆議院議員や、04年3月、同じく佐藤観樹元衆議院議員が詐欺罪で逮捕されたのとあまりに違う。2人ともそれらを私的に使ったのではないのに「詐欺」とされたのに対し、遙かに巨額かつ組織的、長期にわたって行われた私的流用が「不正経理」とは、行政の裁量権、検察の起訴便宜主義は日本のモラルを壊している。彼らは、各警察、検察の裏金作りが社会的に問題になっている時期に当たって不運だった。このような警察、検察のネコダマシ的対応は毎度のこと。もっと早くイラク人質事件、年金未納問題のように大きな国民の関心事が起これば逮捕などされなかったかもしれない。今では、裏金問題の報道を見ることさえ少ないのは「最後は腰砕けになる日本人とは……」(督永忠子、『岳人』、98年6月号、164～165頁)言い得て妙である。04年9月に発覚した、98年まで10年間、家政婦を公設秘書としていた参議院議員の小野清子国家公安委員長の問題は、しばらくで忘れ去られ不問になった。04年8月、旧橋本派に対する日本歯科医師連盟からの1億円裏献金事件では、やはり会計責任者だけ逮捕され、05年12月8日、政治家7人は起訴猶予になった。06年には、岐阜、長崎、島根県庁の裏金が発覚し、中間管理職の自殺者まで出ても、トカゲのしっぽ切りの懲戒処分と、裏金の返還だけでうやむやになってしまった。お金を盗んでも、公務員がすれば公務となるので刑事事件にはならないようだ。

その他、スピード違反等の交通違反、風俗関係等、法律の運用次第でいくらでも自由に罪人を作ることができる権力をフリーハンドで彼らに持たせておけば、安全でクリーンな警察国家になるに違いない。最近では、反戦ビラ配りが住居侵入として逮捕される事件が相次ぎ、05年12月9日には、高裁で有罪判決が出た。どこまでやるのか。このような国家の治安を守るための法執行機関、検察庁、警察庁だけが財務省、近くは外務省と同様に自浄能力を持っていない。パチンコは、警察のお目こぼしで成り立つ景品を換金するシステムがあり、明らかにギャンブルだ。90年のプリペイドカード"PC"導入後、一層ギャンブル性が強くなり社会問題ともなっている。PC会社は警察官僚の天下り先だからだ。監督と取り締まりが実質的に同じだから、やくざの仕事を警察が奪い利権とするようなことが起こる。風営法も同様だ。明らかに売春は警察のお目こぼしで公然と合法的に行われている。これも本来はやくざの飯の種であった。どちらが紳士的な運用をしているかはともかく、裏世界の非合法な組織より、合法的権力がその様なことに手を染めるのははるかに罪深い。後ろめたさを持たない組織だから始末に負えない

い。92年施行された暴対法以前は、町中に組事務所が堂々と開設され、組員の名札が公然と張り出されていたのに、以後、海外のマフィアのように非公然化して、暴力団の日本的治安維持機能を奪って自らの天下り先、利権化したのは警察である。「盗人にも五分の魂」、クリーンな社会を求めため合法的な絶対権力を、秘密主義甚だしい組織に持たせることは不気味だ。「水清くして魚住まず」ではなからうか。しかし、暴力団が都道府県公安委員会によって「指定暴力団」と認定されるとは、まるで公認された暴力集団が公認された違法行為組織のようだ。そんなに反社会的な暴力組織なら、解散させるか、事業内容を変更させなければならない。自ら管理者としての役割がなくならないよう、暴力組織を温存するために「指定暴力団」を作っているとしたかと思えない。

41年12月翻訳が遅れ真珠湾攻撃開始後に宣戦布告書を渡した在米日本大使館の外交官は、戦後、事務次官まで出世している。そのため彼らは今でも批判されるが、そんな単純な話ではないようだ。その通告文では交渉打ち切りを言っているだけで、開戦への意思表示がないという。そのため内容を直接確認されるのを嫌い、東京の米国大使にも渡すことができなかったらしい(井口武夫、「日米開戦の機密資料を公開せよ」、『朝日新聞』、00年12月7日)。半世紀が過ぎても、日本は卑怯なだまし討ちをしたと批判されるのは、問題先送りの腰が引けた姿勢から生じている。当然、本庁の意向に愚直に従っただけの外交官は出世する。日本はいつまでも戦前を引きずって責められ続ける。89年、昭和天皇死去の折、各官庁出先には大正元年の閣令による甲旗の掲げ方(図付き)が送られている。小泉首相でさえ、敗戦の日靖国神社に参拝するという01年総裁選の公約を反故にし続けた腰抜けだ、覚悟がない。

戦後、ユダヤ人を救ったとして有名な杉浦千畝は、外務省の意向に逆らったとして辞職させられている。最近では、政府のイラク戦争支持に異議を唱えた大使が解任された。このように、この国では国の意向に対し物申すだけで切られる。これでは民主国家とはいえない。どちら側が反日的といえるのだろうか。しかし、かの大使のノンキャリアに対する批判の言は凄まじい。「キャリアの中に出来の悪い者が存在することは事実である。しかし、ノンキャリアはそれ以上にできが悪い。そもそも制度上、キャリアとノンキャリアの試験がべつに設けられているのだから、優秀な者や志の高い者がキャリアの試験を受けるのは自然である。最初からノンキャリアの試験を受けるような奴は、歩留まりを見越した敗北者なのである。それでも、多少とも骨のあるノンキャリアなら、外務省に入ってから、その処遇の歴然とした差を見せつけられたとき、発奮してキャリア試験を受け直すか、さもなくば役人人生に見切りをつけて、早々と辞めるかどちらかの道を選ぶ。しかし、そのいずれでもないノンキャリアは、幹部にごまをすって少しでも甘い目を見ようとするか、あるいはやる気をなくして不満を抱えながら日々の生活を送っていくかのどちらか

に墮していく」(天木直人、『さらば外務省』、講談社、03年、208～209頁)。そのままパロディーにすると、「ノンキャリアの中に出来の悪い者が存在することは事実である。しかし、キャリアはそれ以上にできが悪い。そもそも制度上、キャリアとノンキャリアの試験がべつに設けられているのだから、学校秀才や出世欲の高い者がキャリアの試験を受けるのは自然である。最初からキャリアの試験を受けるような奴は、歩留まりを見越したゲスなのである。それでも、多少とも骨のあるキャリアなら、外務省に入ってから、その封建的な国益無視の組織を見せつけられたとき、発奮して異議申し立てして戦うか、さもなくば役人人生に見切りをつけて、早早と辞めるかどちらかの道を選ぶ。しかし、そのいずれでもないキャリアは、上司や与党政政治家にごまをすって少しでも甘い目を見ようとするか、あるいはやる気をなくして不満を抱えながらレセプションに明けくれ蓄財にはげむかのどちらかに墮していく」。このような選民意識の持ち主だから、外務省の良識派官僚も度し難い。それを持ち上げるジャーナリズムも同じ穴の貉なのだろう。

それでも多くの問題はあがるが、この国の民主主義はまだ生きている。民主主義がなければこれらの問題も表沙汰になることはなかったはずだ。しかし、IT化による国民の個人情報集中管理が行われても全く問題がない事は、成熟したこの国のシステムを見れば明らかだろうか。

公正、公平な準国営放送は政府の意向に反しないことに対してのみ、しばしば一つの項目のまとめとして「が望まれます」、「が求められます」と意見広告し、警察、検察のリーク捜査情報、発表した容疑を「が分かりました」と確定した事実かのように報道する。

「明日、逮捕」、「明日早朝、強制捜査」等と一面に載せる良識ある大新聞は「明日の新聞」のようだ。容疑者に資料を処分したり自殺する時間を与えるとはどんな意図で、誰が利益を得るのかさっぱり分からない。新聞が検察や警察との結びつきを誇示し自らの権威を高めているのか、検察や警察がリーク情報を流すことにより新聞に恩を売って支配しようとしているのだろうか。

朝日新聞は、06年1月25日から数ヶ月「ジャーナリスト宣言」キャンペーンを始めた。ラジオやテレビで始めて聞いたときはギョッとした。感傷的なBGMと共に、「言葉は感情的で、残酷で、ときに無力だ。それでも私たちは信じている、言葉のチカラを」というナレーションが流れる。まるで売れない詩人の世を拗ねた嘆き、感情的な「ポエット宣言」だ。ジャーナリストなら「言葉は理性的で、暖かで、しばしば有効だ。だから私たちは信じている、言葉のチカラを」といふべきではないのか。何を勘違いして感傷に浸っているのか。これが、虚偽メモ報道への反省から出た、ジャーナリズム再生のための宣言とは「おまえは既に死んでいる」。

アメリカとの条約や占領下の日本の政策決定過程さえ日本では情報開示されず、全ての情報をアメリカ公文書館に依っているという。また01年4月の情報公開法施行の前には、霞ヶ

関から秘密文書を燃やす煙が出ていると揶揄されるほどの秘密主義、はっきりいえば後ろめたい決定、不法な決定をしているので、それはとても後世の判断にゆだねることができず、記録を消滅させなければならないという日本政府の矜持の元で『1984年』的世界はずでに超越しているのかもしれない。少なくとも、戦後の日本の歴史は未来永劫研究不能、実際の政策担当者でさえ検証不能であり、この健忘症、記憶喪失国家は現在同様、将来も同じ間違いを繰り返し続けるに違いない。00年の省庁改変で「真理省」を作る必要がなかったくらいだから。沖縄返還には密約があると、当時の外務局長が証言しても、アメリカ公文書館の資料が裏付けても日本側の情報は開示されない(『朝日新聞』、06年2月24日)。当時、密約をスクープして有罪となった記者が名誉回復の訴訟を起こしたが、07年3月27日の東京地裁の判決で、「除訴期間」を理由に門前払いされた。この国には三権分立もまともな司法もない。

02年初頭、田中真紀子外相は、外務省官僚のリークとサボタージュで外相の座を追われ、返す刀で外交族の鈴木宗男は極秘内部メモ文書の開示で失権した。それは、自らの組織保全のため恣意的に情報開示、リークしたり、都合の悪いものは開示しない、守秘義務として隠匿するという行政機関の性癖を象徴するものだった。日本の行政機関は、法律に基づいて手続きし執行するだけの存在ではなく、自分の都合でいかようにもそれを運用する能力がある自立的で有能な組織であることを示した。外務大臣が官僚の人事権さえ掌握していないことが白日の下になり、03年10月には国土交通大臣も人事権を事実上持っていないことが分かった。これは自己増殖、自己保存機能しか持っていない、国民から何らのチェックも受けない官僚機構が実質的日本の支配者であることを明らかにしたグロテスクな事件だった。そして、改めてどんな個人でさえ組織に対抗できるものではないということを実証した。日本では、個人が力を持つためには水戸黄門のように必ず権力組織のバックボーンが必要だ。『水戸黄門』等で繰り返し教えられる日本の文化は、本質的に権力組織は常に正義だ、いかなる個人も権力組織にかなわない弱い存在だ、そして一般大衆は権力組織の力を借りずに問題を解決できないということだろう。これでは「日本人は12歳」といわれても仕方ない。行政府にきちんと管理されなければ仕方がない。防衛庁では、02年に情報公開請求者を調査したリストまで作られ、03年には自治体から個人情報を集めていたことが発覚した。これは一事が万事、日本の土着的ムラ社会をきちんと指導したいという行政機関の善意に満ちた性癖ゆえだろう。皮肉ではなく、本当に善意で行われれるのだからどこまでも突き進んでいく。思想性の欠如した従順さが日本人の美德だ。鈴木宗男は02年8月29日、別件で逮捕され437日拘置された。起訴事実を否認するとこのような仕儀を受け、もし認めれば保釈されるが公判で覆すのは困難だ。

01 年度政府予算案で、年度末予測累積債務 666 兆円と公表され、01 年 3 月には財務大臣が「我が国の財政は、今破局に近い」と答弁した。「ヨハネの黙示録」では「666」と額に刻まなければものの売り買いができないとの脅しに屈した人は、最後に神の罰を受けたのである。わざわざこのような不吉な数字を並べるとは、国民に対するいかなる暗喩、それとも脅しだろうか。そして戸籍情報に国民総背番号制がリンクした住民基本台帳ネットワークが 02 年 8 月 5 日スタート、03 年 8 月 25 日日本格稼働して、その番号なくては生活ができなくなればまるで「ヨハネの黙示録」だ。それを独占的に管理するのは、司法でも立法でもなく行政であり、国はその情報を一元的に集める。これは、より広範、精緻に渡る情報を独占したことであり、その権力はこれまで以上に制御できそうにない。本来なら、厳密に本人確認して直接渡すべき性格のものであるはずなのに、お粗末なことに住民票コードは普通郵便で、おまけに世帯単位で送られた。その上、専用回線網を使うのではなく民間の一般回線、インターネットさえ利用してははなはだ信頼性に欠けると言わざるを得ない。ロケットといい、原子力発電所といい、行政が進めようとするのは全て特定大企業への公共事業の色彩を帯びている。そうでなければ、これほど特殊法人はおろか一般の企業にまで天下りが蔓延するはずがない。

民主国家の憲法は、国家権力が不当に国民を支配しないようにするために権力を制限するという思想の元に作られ、国民を縛るためのものではない。権力を持つ者は神ではなく、同じ過ちを犯し誘惑に弱い人間である。だから「個人情報保護法」は、まず一番情報と権力を持つ行政の持っている個人情報を、彼らに勝手に利用させないための制限を設けることが必要であった。公務員は守秘義務があるからといったレベルだから、情報流失が頻繁に発生する。05 年 4 月、全面施行され、官僚の人事異動で学歴なども公表されなくなった。彼らは私人ではなく、公人だから、IC タグでも身体に埋め込み、天下り等をトレースする必要があるくらいなのに。「情報公開法」もしく。行政の持っている全ての情報は国民のものであり、官僚が勝手に始末してよいものではない。全ての意志決定過程を保全、どんなに極秘のものでも時間がたてば全てを公開する義務があるはずだ。良識ある人なら、自らの正当性を証明、後世の判断を仰ぐために全ての記録を残したいと思うだろう。「情報公開法」が 01 年 4 月施行されても、それら情報を開示するしないの決定権を同じ行政が持っているは意味をなさない。その上、どのような情報があるか分からなければ情報公開を請求できないとはよく作られている。この法律の前に「情報保全部」として行政や官僚は資料を必ず作り、それを保全する義務を負わせる法と、別組織で「情報公開省」を作る必要があったのだ。執事が王様に成り代わってはいけぬ。王様は国民のはずだ。情報を恣意的に流し、民意を誘導、操作することはいとやすい。しかし、基礎データが得られない者はきちんとした反論さえできない。情報の独占は権力そのもの

である。対案を出せと言うのは、ナチスの敵対勢力落としの手法だ。強大な情報を集め、スタッフのいる権力に対抗できるはずがない。批判者は可否のみ判断すれば十分であり、批判に答えるのが民主国家では権力を持っている側の当然の責務だ。

イギリスの制服警官はピストルを持っていないのに、日本のようにきわめて武器所有率の低い国の自治体制服警官がピストルを持っていないほど日本は危険なのだろうか。もし政府が常々主張していたように日本が安全な国だったら、皇族に対する厳しい警備も必要ない。徳仁皇太子の山登りでの警備を見ると空恐ろしい。それほど国民を信じていないとは。日本山岳会会員である彼も、大名行列のように山に登るより静かに山を楽しみたいはずだ。おまけに事前にハシゴまでかけてルートが整備されては、面白さ半減。途中はトイレまで作られ、その後手入れもされず朽ち果てる。どれほど多くの人間的喜びを得られていないかと考える時、特権はいかに非人間的、人格無視のものかと思う。好きな登山を気楽に出来るような「平民の自由を与えよ」だ。登山口には記念碑が建てられ、その後の手入れは行き届かない。

75年にエリザベス女王が来日した折りそのあまりの警備に驚き、命が惜しくて女王はやっていられないといったのは有名な話だ。同様なノブレス・オブリージを持っているに違いない天皇も警察と右翼の暴力に守られた現状にはさぞ不満であり、その品格を落とすものと感じている。恐怖と武力で守られた象徴とはおぞましい。治安が悪くなったと喧伝されるようになる遙か昔々から、日本は治安がよい国と政府や警察はいいつつ、その実それは戸籍をベースとした絶対的な国家管理システムと警察力によって守られたものにすぎないというよい例だ。また来るべき国家財政の破綻後は、国鉄改革の時と同様、利益の出る部分は民間(民営化)にそして債務は国が税金から何百年もかけて返済する外ない。その暗い国を維持するために強力な支配システムを現在着々と作り上げ、先進的管理システムの構築を急ぐのだろうか。この世界に冠たるIT技術を輸出して債務の返済の一部に充てるつもりだろうか。しかし、国連や世界の個人情報保護に関する常識では戸籍データのような差別データを収集してはならないということだから、国際的販売力を持たない技術かもしれない。

02年廃案になり、03年5月成立した個人情報保護法では、最もセンシティブなデータかつ膨大な戸籍データはその対象から外され、いわゆる「メディア規制法」になって、権力を持つ公人のスキャンダルは保護される。権力、行政の持っている民の情報こそ保護される必要があったのに。さんざん行政、司法、警察の情報を広報し、記者クラブ体制のなか国家機関の特権的宣撫組織としてこの世の春を謳歌したメディアには、当然の報いかもしれない。報道機関だけ特例的に規制を受けなくても、報道機関と実質的に認定するのが当局では行政内報道機関としての地位を確立したとしか言えない。

国鉄民営化に揺れた時代には、権力の意向に添った国労批判のための全体像を無視した微罪のスcoop報道を連発して、赤字の中心であった新幹線建設費と過疎地の鉄道維持費のことはほとんど報道しなかった。その結果、10年後赤字は解消されるはずが、逆に23兆円に増え利子を含め総額50兆円を60年かけ税金で処理されることになった。経営効率から地方路線はどんどん切り捨てられ、相変わらず政治的に新幹線は伸び続けるが並行する在来線は切られる。地方路線は第三セクター化されたところが多いが、殆どは赤字で財政を圧迫する。次から次に破綻する。既に半ば、国家の財産は合法的にエスタブリッシュメントの手中に収められたようだ。様々な民営化も、結局このように個人、国民が痛みを負うだけのものに違いない。たとえ国家が破綻しても、基本的産業を握っている者は安泰である。国家と公は個人に超越する存在という政治家が、国家の資産を民間会社に払い下げしているのは倒錯しているといえない。

このようなメディアだからこそ、権力に完全に骨抜きされるのは時間の問題だった。しかし、それは彼らのプライドが許さないから反対しているようにさえ見えた。敗戦後と同様、大した反省もせずまっとうなジャーナリストのように振る舞っているだけでは甘い。血に塗られた日の丸と、国旗化を問題にする前に、戦前から綿々と続く軍艦旗のような社旗をまず変えろと突っ込みたくなる。有名大学入学者の高校別合格者数を目玉にする、新聞社(系週刊誌)に学歴社会を批判することは出来ない。学歴詐称として04年9月、民主党の古賀潤一郎衆議院議員は辞職したが、問題が小泉首相、安倍幹事長の学歴疑惑に飛び火したら途端にトーンダウン。そんなに学歴が議員の仕事にとって大きな問題なら、全議員の学歴をチェックすることはたやすいことではなかったのか。03年4月に起こった、何ら(大した)法律違反をしているわけではない、変わった白い衣服を着ているだけのパナウェーブ研究所のキャラバン集団をNHKや朝日新聞でさえ、自らの報道が不安感、騒動を作り上げた元凶にもかかわらず、住民が不安を持っているとさらに問題を大きく報道した。何の法律違反がなくても、警察権力が介入できるというお墨付きを与え、その組織増大に力を貸した。戦争中も、軍部の弱腰をなじり、煽ったのは新聞だ。彼らは微罪や、何人も犯人に仕立てられる公務執行妨害罪に始まり、コロシウムで火あぶりにされたキリスト教徒のように、ジャーナリズムと権力の生け贄にされ国民は喝采した。「予言の自己実現性」的手法は、権力の人心掌握の王道だ。その語り部がジャーナリストだろう。いや、太鼓持ちとして煽った。その間に「個人情報保護法案」も、自民党26年来の悲願「有事関連三法案」も肅々と成立している。国民にそのような胡散臭いジャーナリズムから「個人情報保護」をしてくれるからと錯覚させ、実体は国家による「公人情報保護法」にしてしまうと、さすが官僚。スキャンダルにまみれる政治家、官僚、経営者はほくそ笑んでいるかもしれない。現在、警察庁の統計では少年犯罪は昔に比べ非常に少ないことが明らかなのに、マスコミは子どもを

巡る犯罪が多発している危険な社会になったとキャンペーンしている。これは何のためだろうか。

しかし、田中真紀子という外務省の外敵がいなくなれば、シンパではあるが目の上のたんこぶ鈴木宗男が切られたごとく、権力組織を維持するためには何人も切り捨てられるというのがこの国の掟だ。「明日は我が身」という言葉を知らないのだろうか。04年5月には戦時に国民の権利を剥奪し、管理することを目的とする「国民保護法案」等、「有事7法案」が衆議院を通過して、国民の危機意識を煽る。憲法は息絶え絶え、全体主義国家完成は近い。いつも法案の名前は実体と逆になっているようだ。きっと「新語法」に熟達しているのだろう。

00年11月、国連で採択された「国際組織犯罪防止条約」を03年5月批准し、現在、国内法を整備するための共謀罪が国会で審議されている。何らかの意図がある場合、このような外圧が使われる。対象とする犯罪が600以上なのもべらぼうだが、実行しなくても、相談したり、合意しただけで犯罪になるとは、二人寄れば全て犯罪者である。『1984年』を完全に超越している。自由を守るためにといって不自由な世界を作って矛盾を感じない、完璧に身につけた「二重思考」。

昭和天皇死亡を伝えたある外国の新聞は、日本を一種の立憲君主国と書いていた。01年の中学歴史教科書では立憲君主国と書いた教科書が、検定で修正を要求されたとのこと。しかし96年12月17日起きたペルーの日本大使館人質事件は、天皇誕生日を祝うパーティー、日本のナショナルデイのレセプションを狙ったものだ。日本亡命後発表されたことだが、その時のペルー大統領フジモリは日本国籍も持っていたという。しかし二重国籍を認めない日本が、彼の日本国籍所持を不問にしていたとは信じられない。日本政府は彼の日本亡命後、国際手配されているにもかかわらずペルーへの身柄返還を拒否していた。彼が日本国籍を持つから国内法に基づいた処置という。これでは大きな不正、汚職を隠すためと疑われても仕方ない。彼は、06年のペルー大統領選へ出馬するとして05年11月出国したが、日本の法律によればもはや完全にペルー国籍を持っていないはずの人にそんなことが可能だろうか。その点は報道されない。その後、チリで拘束されたが保釈され、元気な姿が時々報道される。ともかく、つまり外務省は天皇を元首としているらしい。翌年解放された大使は天皇夫妻の写真を背景に、車椅子に座り威風堂々たばこをスパスバ吸いながらインタビューに現れたのにはたまげた。不敬罪として右翼に命を狙われるか、よくて左遷か人ごとながら心配していたら栄転したとはさっぱり分らない。これでは天皇の威を借る「害無能省」といわれても仕方ない。日本の在外公館の入り口に菊の紋章が掲げられているのは、宮内庁の下部組織を意味するのだろうか。それなら、一般日本人海外旅行者にけんもほろろの対応することが珍しいことでないのは、皇族でないからもっともだと納得できる。

憲法は押しつけられたものとして、九条を改訂しようと主張する人は一～八条をいかに改訂するつもりだろう。そもそも九条は、幣原首相の発意により天皇制を守るためにその廃止を言う国々を納得させるため入れられたものであり、小学生にも完全理解できる明確さを持つ。戦争を放棄したが自衛権は放棄してないとか、「陸海空その他の戦力は、これを保持しない」が自衛隊は戦力でないから許されるとか、法律はいかようにも解釈可能という見本を国民に示している。このようなことに対する異議申し立てを権力側は、神学論争とミスリードさせようとするが、そんなに高尚なもので、分かりにくい問題でもなく、単なる詭弁に過ぎないことは小学生に尋ねても分かるはずだ。これでは、まともに日本語で考えることはできない、教育ができないことは権力側も分かっている。国際化のため小学校から英語で授業を行なおうとすることはもっともだが、それでは穏やかだが事なかれの、事大主義的という日本人の美德が失われ、国家統制が難しくなる両刃の剣になりかねないことに手を着けざるを得ないような末期的知力の低下だ。それとも、日本人はとくに「二重思考」や「^{ニュースピーク}新語法」に熟達しているからと安心しているのかもしれない。国会における政府答弁や官僚答弁の見事で不毛な饒舌さを見ればよい。それが受け入れられていることが証拠だ。正攻法で答えず、揚げ足や言説を取られないことに特化、論理をすり替え、はぐらかし何度もトートロジーを繰り返す。完全に論理的破綻しているとは言い切れないが、不誠実かつ不的確さは明らかであり、教育的配慮するならば子供たちには見せられまい。飛鳥時代前から平安時代にかけて中国から文字そして抽象的概念を漢語で、幕末から明治初めにかけては欧米の近代的概念を漢字訳で、現在は音訳、カタカナ訳で導入した日本語は、自然言語にもかかわらず経験や実体とリンクしないエセ形式言語になっているため、現実を捉え分析し、判断する能力に欠けているのかも知れない。現実を直視し受け止める言葉を持たない国や人は未開に違いない。

日本の憲法は最初の一～八条において、天皇の権力を制限するという異例な構成を持ち、九条はそのような旧体制、国体を残すための担保として作られたものだ。それすら自前では作れなかったことはともかく、国家体制、国体は戦前と基本的に変わっていない。そこで、ドイツやイタリアと異なり日本では戦前がそのまま温存され、そのために戦後処理が中途半端になり今でも近隣諸国から不審の目で見られるという不遇をかかっている。ヒトラーは自殺し、ムッソリーニはパルチザンに殺されたが、裕仁天皇は象徴となって戦後も海外では元首扱いされた。ドイツやイタリアは、戦後、国旗も国歌もすっかり変え、ナチス党もファシスト党も既がないのに、天皇制も靖国神社という宗教的軍事施設も宗教法人として健在。敗戦後 60 年たっても、相変わらず戦前の侵略戦争の精神的支柱になった神社の責任を問わない付けは、将来の日本国民が担わされる。その不快さといつまで付き合い続けなければならないかと考えただけで、疲

れてしまう。日本人は全てアレフの信者のようなものだ。オウム真理教がアレフとなり、教祖の死刑が確定しても世間や公安調査庁は全く監視の目をゆるめないのと同様だからだ。国歌も国旗も戦前そのまま残り、最高責任者は何の罪にも問われないのだから、日本人でいることはアレフの信者以上に世界の中で厳しい目にさらされ続けても当然である。

戦中、商工大臣を務め、A級戦犯容疑者になった岸信介は戦後、総理大臣になっている。帝国陸軍のエリート参謀だった瀬島龍三は、参謀時代の人脈の中での上がり、戦後の政財界に多大な影響を与えた。帝国海軍、第一航空戦隊参謀として真珠湾攻撃を立案、数々の大作戦に係わった源田実は、戦後、航空自衛隊の幕僚長となり、その後、参議院議員となっている。日本のエリートは「敗軍の将、兵を語らず」の謙虚さのかけらもない人がいかに多いか。「生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」と戦陣訓を説いた一番の責任者、東条英機が自殺未遂するとは無様だ。その人が、処刑後、明らかに戦没者ではないのに靖国神社に祀られてしまうのは、本当に不気味である。『ニッポン日記』(マーク・ゲイン、井本威夫訳、筑摩書房、63年)には、どれほど巧妙に根深く戦前が戦後まで引き継がれたか、それを許した度し難い日本の大衆の奴隷根性、権威主義と権力側が旧体制を残すために面従腹反、占領軍を手玉にする様が事細かに記録されている。もし、それほど押しつけられた憲法や戦争の評価が不満なら、サンフランシスコ講和条約を破棄して、自らの戦争責任を明確にした上で、アジア諸国等、各国と新たな講和条約を結び、先の大戦を「自存自衛のため」の「自由で平等な世界を達成するため、避け得なかった」と評価する靖国神社に、毎年きちんと参拝すべきだろう。近隣諸国からの批判に屈して靖国参拝を避けるのではなく、自らの過去へのけじめとして終始一貫した行動を取るべきだろう。

小泉首相は5年の総裁任期最後、06年の敗戦の日、始めて公約の8月15日に靖国神社に参拝し、稀代のアジテーターは気取って首相の座を去った。それにつけても、人間誰でも持っている卑しさや欲望を弱者や近隣諸国への憎悪に変える「ワンフレーズ」弁舌は鮮やか、一時だけでもおぞましい日本の将来への不安を忘れさせた。そして、安倍晋三内閣が06年10月4日成立した。ところが、「憎悪の時間」で煽られ続けた人々はそれ以上の刺激を求め制御不能になってしまった。現憲法とペアである教育基本法は06年12月22日改訂施行され、07年1月9日、防衛庁が防衛省に格上げされた。07年1月26日の施政方針演説では「美しい国」といった情緒的抽象語や「戦後レジーム」といったカタカナ語がふんだんにちりばめられ話題になったが、小泉的勇猛な弁舌に慣れた人々には、彼の言葉はリップサービスとしても勢い不足。93年の河野官房長官談話において旧日本軍の関与を認めて一応の決着を見た従軍慰安婦問題を、06年10月25日、下村副官房長官が軍の直接関与はなかったとの談話を出し、すったもんだの末、結局07年4月27日の日米首脳会議で安倍首相が

ブッシュ大統領に93年の河野談話を継承すると説明してうやむやのまま終わってしまった。そして、とうとう憲法改訂の手続きに入るための国民投票法案が07年5月14日成立、3年後に施行されるに至った。次は「戦争は平和」「平和は戦争」と、コロシウムの中で剣闘士の命がけの戦いに喝采するだけだろうが、誰も自らが剣闘士にされるとは思ってもいない。本当に「戦後レジェーム」を見直すなら、サンフランシスコ講和条約を見直すことから始まるはずだが、彼らは絶望的に巨額になった国の累積債務を処理するため、自暴自棄的にまたどこかと一戦を構えるつもりなのだろうか。今の政権与党は、まるでテスト直前になるとそのストレスから逃れるため、無性に他のことがしなくなり大切な試験勉強に手が着かなくなる出来の悪い学生だ。現在の財政状況は、01年3月8日、財務大臣が「破局に近い」といった時より、はるかに悪化している。この国の指導者達は、直面している一番の問題を避け先送りする理由を作るために、今差し迫った問題ではないセンシティブな問題を俎上に上げ、国民を感情論で煽り煙に巻こうとしているかのようだ。本当の破局が近いような気がする。

「過ちは繰り返しません」と感傷的にいうだけでなく、なぜその問題が起こったのかはつきりさせ、その責任を明らかにして厳しく対処しなければ、また間違いを繰り返す。45年3月10日の東京大空襲で10万人、8月6日の広島で25万人、8月9日の長崎で7万人殺されたと残虐性を主張してもだめだ。誰が起こした戦争で、何を守るために降伏をためらった結果に起こったことか検討すれば、因果応報であるとアジア諸国の人々が考えても当然である。一発の爆弾で一度に多くの人が殺されても、一人一人を銃や刀で同じだけ殺しても死者の数は同じだ。日本人の戦死者より、日本人が殺したアジアの人の数ははるかに多いのだ。2月13日のドレスデン大空襲で7万人死んだからとて、ナチスドイツの罪は何ら免罪されない。

もちろん戦前、日本が行ってきた植民地獲得のための侵略は、それまでの欧米列強帝国主義国家が行ってきたことと大差ないことだから、日本だけが責められ続けることに反感を持つ右翼国粋主義者の考えも一理ある。だからといって、欧米帝国主義国家が分け前をくれなかったから、日本の侵略も当然と居直るばかりでは、アジア諸国から最後の帝国主義国家、日本だけがこれまでの植民地主義の責任を全て押しつけられてしまう。自らの責任を歴史の中で相対化して評価し、ありのままの事実を受け入れない限り、これからも日本だけが悪者にされてしまう。日本が最後の帝国主義国家としてデビューした頃には時代が変わり始めていたのだ。アジアの欧米植民地から解放して大東亜共栄圏を作るのだ、八紘一宇といったキャッチフレーズで侵略を正当化してしまった。いつまでもアジア諸国を、教科書、靖国神社で挑発し続け、外国からの反発を逆に愛国心に変え、国内の不満を忘れさせ支配しようとする政治家にころりとだまされる国民の作る国は、これからも自分の国の問題を先送り、同じ間違いを繰り返す続けることは

確かだ。82年には、「近隣のアジア諸国との間の近現代の歴史的事象の扱いに国際理解と国際協調の見地から必要な配慮がなされていること」という教科書検定基準における近隣諸国条項を加えているが、今でも侵略を正当化、あるいは責任を曖昧にするように歴史教科書は書き直される。

95年の村山談話では「わが国は…国民を存亡の危機に陥れ、植民地支配と侵略によって、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えました。私は、未来に過ち無からしめんとするが故に、疑うべくもないこの歴史の事実を謙虚に受け止め、ここにあらためて痛切な反省の意を表し、心からお詫びの気持ちを表明いたします。」と述べたのにもかかわらず、現在でも小泉首相以下、多くの国会議員が靖国神社に参拝するのでは台無し。

敗戦後60年たっても、沖縄には在日米軍の75%がある。日本の面積の0.6%の沖縄の面積の20%が米軍基地だ。講和条約が成立して半世紀以上たっても、事実上の占領状態が続いているのは歴史上類がないだろう。06年4月25日、在日米軍再編で日本側の負担は3兆円と米国防副次官が発表した。アメリカ陸軍第一軍団司令部がキャンプ座間に置かれる。首都の周辺にこれ程米軍基地を配備するのは日本に対する脅しか、保護国化かのどちらかだ。本当の戦後は、米軍撤退後に違いない。ユーラシア大陸の東岸に浮かぶ「不沈空母」日本列島がアメリカの世界戦略にそんなに重要なら、逆にそれなりの費用を頂く必要がある。日本は、米軍が存在するだけで敵対勢力から攻撃を受けるリスクがあるのだから。エリート官僚の殆どが入省後アメリカの名門大学に留学していることから、日本は明らかにアメリカの植民地だと分かる。こんな事実上の属国の地位に甘んじるくらいなら、アメリカに併合され51番目の州になればどんなによかったか。人口からして日本語も公用語に加えられ、こんなに英語で苦勞することはなかったし、とくに日系の大統領も生まれただろう。国旗は"the Sun, Stars and Stripes"、国歌は"The Sun, Stars and Stripes"でよいだろう。おまけに、駐留米軍には破格な駐留経費が支払われ、日米地位協定という不平等条約があり、首都圏西部の航空管制権さえ米軍が持っていることが、いつ暴発するやも知れぬ日本を封じ込める栓の役割を持つものと近隣諸国から認識され、属国状態を望まれていては真の独立は望めない。日本人として生まれただけで、生まれ出ずる前の責任を問われ続ける不快さは国民を萎縮させる。だからといって、アジア諸国の反目を逆手に取り「愛国心はならず者の最後の逃げ場」とばかり、内患を外国への憎悪とすり替え国をまとめようとする政治家は、まさしく反日的あるいは天皇の権威を利用して私利私欲に走る不敬の輩だ。貿易でしか生きるすべのない日本で、そのようなことは自殺行為だろう。すっかりしたいものだが、何かにつけて物事を曖昧にし続け妄言がまかり通っている付けは、多くの国民の閉塞感とそれに伴う生理的サボタージュ、少子化かもしれない。

「普通の国」のように軍隊を持つと明記するというなら、「普通の国」のように立憲君主制にするか共和制にするか決める必要がある。押しつけられたという「象徴天皇制」は受け入れられないはずだ。

児玉誉士夫は、74年5月という天皇の安定した権威が既に再構築された時代の余裕で、慈愛に満ち合理的な自らの懐の深さを歴史に残すために演出したポーズかもしれないが、裕仁天皇は少なくとも道義的には責任をとって退位すべきだったと答えている。国民あっての国家、国民あっての天皇であり、天皇のために国民が存在しているのではないとも言っている。(大森実、「大森実突撃インタビュー」、『戦後秘史1』、講談社、75年、247～312頁)

天皇という国家の最高責任者でさえ戦争の責任を取らなかったのだから、いわんや他の者は何をして責任を取る必要はないというモラル退廃をもたらした。裕仁天皇が、あの戦争は反対だったが、立憲君主という立場ゆえ止めようもなかったなら、あの戦争は否定されるべきであるし、天皇が主権を持っていたなら責任は明らかだ。天皇が範を示した無責任体質は戦後、我々の血肉になった。そして、憲法の定めている国事行為しか行えないはずが、皇室外交まで行ったり、現政権のために天皇の権威を利用しては、天皇という制度がある政権の命運と共に消え去りかねない。独立行政法人とでもすれば、寄付金が殺到し、それを基に社会福祉事業でもしていただければどれ程天皇の権威は高まり未来永劫栄えることか。理想的には天皇教という宗教法人にして全国の神社の中心となればよいだろう。現憲法でも天皇の国事行為はほぼ儀礼だけだ。宮中祭祀でさえ、新嘗祭と大嘗祭を除いて明治時代に作られたものだ。天皇の品位を、世俗の国家権力によって利用させ貶めるのは昭和天皇までで十分ではないだろうか。ローマ法王のように世俗の権力から離れた方が国際的に通用するはずだ。いっそ、バチカン市国のように天皇神社市国として独立してはどうだろう。憲法に縛られた世継ぎ問題は霧散霧消、法的制約も宮内省の横槍もなく十二分に皇室外交を展開できる。「天道、是か非か」、「天皇、是か非か」。

少なくとも天皇一族を憲法に幽閉することは、たとえ特権を与えられていても、右翼政治家の国民統合の象徴として基本的人権を奪うことは残酷だ。特権を持つ故に職業選択の自由も、移動の自由も、恋愛の自由もない。少なくとも、現憲法は天皇家にとって非人間的であるので改正されるべき、と保守政治家や右翼の誰も主張しないのが不思議だ。女帝を容認するかしないかという話は出ても、憲法の虜囚、「象徴」から開放しようという話が一切ないのは、天皇を人間扱いしていないことだ。裕仁天皇は「人間宣言」したはずではないか。06年1月、そのような非人間的扱いを止めるべきとの本(板垣恭介、『明仁さん、美智子さん、皇族やまめませんか』、大月書店)は出たが、天皇主義者にさえ無視される。結局、女帝問題は喧々囂々の議論の中、皇室典範を天皇の地位は長子が継ぐことに変更することが決まっていたその時、2月

7日、突然皇太子の弟の妻が妊娠していると発表され、全ての話は振り出しに戻り消滅してしまった。既に男子とのことが判明していたのだろうが、何ヶ月も何をやっていたのか。その議論には、明仁天皇の従兄弟も参加し、国民のことを「民草」と書いていたことが報道され(『読売新聞』、05年11月3日)話題になった。裕仁天皇は、雑草という名前は侮辱的な感じがして好きではないと言ったが、「民草」も侮辱的な感じがして好きになれない。皇族を止めると大騒ぎしていた本人が、今になって高貴な血筋を持ち出す矛盾と、時代錯誤的感覚に象徴天皇制の黄昏を感じる。

グローバルスタンダードを唱えつつ元号を墨守、西暦2000年、ミレニアム記念に2000円札まで発行(平成10年に10円札を発行するなら分かるが)する節操のなさは無様以外の言葉なし。欧米の国王ならまだしも、天皇が国事行為を行う時、モーニングを着ているのは日本の伝統とは思えない。ローマ法王がモーニング姿で祝福を与えても、白けてしまう。すぐ途切れてリセットされてしまう元号では、過去とのつながりが希薄になり、歴史が連続しているとは実感できにくくなる。「問題は過去を克服することではなく、元号と共に水に流すことなく「心に刻む」ことだろう(『荒れ野の40年—ヴァイツェッカー大統領演説全文』、永井清彦訳、岩波ブックレット、86年、16頁)。卒業式の定番「蛍の光」や「仰げば尊し」がスコットランド民謡であるのを始めとして、明治以降に学校教育を受けた日本人の音楽、唱歌は低い文化を高めようという理想の元、国家的に作られたものだ。ところで、「仰げば尊し」の2番は立身出世的であるとして削除されている。「互いに睦みし日頃の恩、分かる後にもやよ忘るな、身を立て名をあげやよ励めよ、今こそ別れめいざさらば」だ。しかし、1番の「仰げば尊し我が師の恩、教えの庭にははや幾年、思えばいと疾し、この年月、今こそ別れめいざさらば」は極めて封建性が高い内容ではないのか。まさか、国旗、国歌に反対する教師たちが歌わせていないか、非常に心配になってしまった。西洋化のため日本の伝統音楽はきれいに切り捨てられ、現在ではごく一部が教養題目として残っているだけ。TVのおちゃらけ番組のBGMにもクラシック音楽が頻繁に使われるのに、日本の古典音楽を耳にすることは希だ。バッハは18世紀前半、モーツァルトは18世紀後半、ベートーベンは19世紀初めの作曲家だ。彼らが残した曲は今でもしばしば耳にしても、日本で同じ時代、江戸時代の音楽は全く思い浮かばない。美術、図画工作も同様だが、浮世絵が西洋美術に大きな影響を与えていたことが大いに異なる。鳥獣戯画以来のアニメ文化は世界を席卷さえしている。日本人、日本の文化は言語的ではなく絵画的なのかも知れない。それは、日本語が抽象的概念を全て漢語から、あるいは西欧語から漢字に翻訳して借用しているだけで、具体的な内容に根ざす自然言語の大和言葉に馴染んでいない未開の言語だということに原因があると思う。日本では古くから、漢字で書かれているこ

とは高等なこととされ、それを覚えることが学ぶことと考えられてきた。文章に漢字が入っていると分かったような気になり、内容があるものに見える。中国語を見ても、何だか分かった気がする。その内容を考えなくても、知らなくても、漢字さえ使えば分かったような気になる言葉が日本語なのだ。話し言葉も同様だ。しかし、それで安心して、いつまでも自分の言葉で考えることが出来ない嫌いがある。実際、漢字なしで抽象的なことを考えることは非常に困難だ。だから日本語人は、俳句のように雰囲気、空気だけを伝えることや、身辺雑事のそこはかとない雰囲気を語ったり、性愛の機微を表現したり、大きな歴史の流れを傍観者として大所高所から総括することに長けていても、現実を抽象し自立した個として受け止め、社会と折り合いを付けて生きる知性と行動する遅さが欠如している。個人の無力感とそれに伴う一切の免罪、無責任が特徴だ。日中戦争当時、中国を軽蔑しながら、敵性言語、漢字を禁止しなかった、いや出来なかった。太平洋戦争では、欧米文化に憧れ尊敬していたにも拘わらず、敵性言語として英語を禁止したが、漢字で書き直しただけに過ぎなかったものばかりだ。言葉は文化だと言うが、中国語、つまり漢字の助けなしで成り立たない日本の文化とは、その程度のものだということが分かり悲しくなる。だから日本語では、並大抵の努力でまともを考える能力が身につくとは思えない。たぶん、漢字の使用を出来るだけ避け、漢字の意味を説明しなくても分かる言葉を使うことだけが、日本語で真っ当に考えることができるようになる唯一の道だろう。それが出来ない時は、せめて一つ一つの漢字の意味をはっきり掴んで言葉を組み立てることになるが、その知識のない人を煙に巻くのは簡単でも、誰の心にも届く言葉にするのは難しい。書生論は世間に受け入れられない、現実を変える力になり得ない。本人すら本当には理解できない。逆に絵画的能力が優れる。左脳の未熟さを、右脳が補っているわけだ。

今生きている日本人は江戸時代までの文化の多くを忘れ、西洋に接ぎ木されて作られたものだ。体育は、戦中を頂点として軍隊的集団行動訓練が今だ大きな柱になっており、西洋一般市民社会化は不十分だ。日本の社会は、西洋の軍隊社会と比べればよく理解できるという。西洋の一般社会と比べるから、奇異に映ることがあるだけのようだ。『日本の軍隊』(飯塚浩二、岩波現代文庫、91年)は合理性、効率を旨とする本来の軍隊とは異なる、特有の自死的美意識を持っていたといわれている。スポーツさえ、高校野球のように身分関係の秩序を大切にしている精神主義的傾向を持っている。働きバチのようにパーツとしての安心感「国体」の上に胡座をかいて、個人が責任を持って社会の中で生きているといった実感から離れている未成熟、思春期のままの感性が日本語人の特徴だろう。自惚れと自己中心的正義感、相手の立場を考える想像力の欠如した原始的自己主張の強さ、そして時に強いものに巻かれる卑屈さと打算。

ここ10年間、子供の運動能力が低下の一方なのは、車だらけで遊ぶ場所もないことや、文明そのものができるだけ体を動かさないこと、楽にすることだけを目的にしているから進歩の

証といえるだろう。嘆くことではない。

00年、日本とオランダ交流400周年でオランダの皇太子が来日した折り、日本の皇太子との新聞紙上での扱われ方の違いは興味深かった。オランダ皇太子のことを「ウィレム・アレクサンダー皇太子」と表現したら対等に「(姓を持たないので姓無しで)徳仁皇太子」と扱うかと思えば、「皇太子様」と名前なしで敬語までつけている。今でもこのような礼を失した扱いをしていて、よく国際問題にならないものだ。例えば「プッシュ大統領」に対し小泉首相のことを「首相様」と新聞は書かなかった。「様」ではその昔、唯一日本のパスポートが通用しなかった国と同じだ。ところで、内輪の人に対しても敬語を使うような間違いを犯すのは、皇族と先生と呼ばれる人種だけだ。教員は学生、生徒、児童の個人情報に対し「守秘義務」があるとさえ思っていない。取材されると、得々と成績や性格を喋る。

この閉塞感を克服するアイデアは、長期山にでも入って、社会状況から距離を置く事によってのみ得られるものなのかも知れない。

